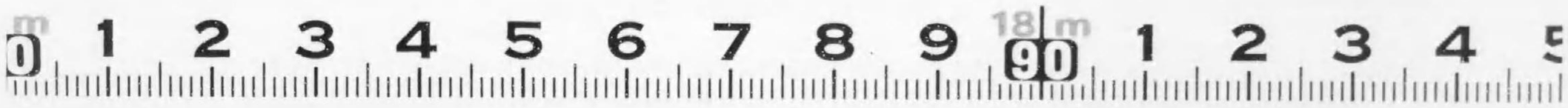
賀



特11
18

轉八

起正
7. 4. 29
内交

序

成功！成功！此言は實に現代青年の欣慕して止まざる處である

然り何人か成功を希はざるものやあらん。自己の目的を達し、而して社會に其重き地歩を占め、萬人の憧憬たして一身に集むるや、男子の面目之れに勝るものはないのである、然らば即ち此成功の月桂冠は果して如何にして之を得べきか？吾人は叫ばんと欲す、一に吾人の目的に對して奮闘し、努力し、七轉八起の勇を養成することを誰か所謂順風に帆を擧げたるが如くにして、些少の危險蹉跌なく成功の彼岸に到達せん事を望まざるものあらんや、然れども如斯

幸福は到底之れを望み得べからざるのである、愛に於てか一度成功の壇上に立つて、歡聲天地を動かさんと欲するならば幾度か失敗と蹉跌とを踏まればならぬのである、果して然らば身を成功のハラダイスに置かんには、先づ失敗に應ずるの覺悟と、而して失敗に處して益々人格を向上せしめ、八起の勇を養成せねばならぬのである本書は即ち此確信に依つて上梓する處であつて、幸にして奮鬪努力を辭せざるの青年が、七轉八起の勇氣を養成するに於て、少くとも參考の資となるを得ば、著者望外の幸耳。

大正六年將に暮れんとするの時山陰角盤山麓客舍於て

北堂識

立志立功 七轉八起目次

▲吾人は奮鬪し努力せざるべからず……一
奮鬪是れ吾人生存の意義也……
羅馬國民たれ羅馬國民たる勿れ……
奮鬪の源泉は是？……
奮鬪的生活の權化……

▲現代は思索よりも實行の時也……三
現代文化の傾向……
倫理的人格平等觀……
組織的活動の能率……
此眞理を自覺せよ……
最後の勝利は即是？……
▲須く空想を排し理想に生くべし……四

理想は現實との調和……
處世の要訣は理想を主眼とせよ……
空想是れ病的思想の産物？……
▲自主こ！自立こ！……五
現代青年の任務……
精神一到金石亦た透る……
志は須らく高尚遠大なれ……
鞏固なる自信力……

倦まず撓まず漸進せよ……
艱難是汝を玉にす……

▲精力の發揮と身体の錬磨……六九

精力とは何ぞや……
死而後已……
向上發展と精力の傾注……
身体の錬磨と精力の發揮……
健全なる精神と健全なる身体……

▲吾人は斯くして成功す……八五

剛健雄大の心志……
一忍以て百勇を支ふ……
克己は最大の勝利なり……
成功の鍵は卽ち是也！……
努力せよ職業は神聖なり……

▲失敗は是成功の基……一〇三

失敗の原因……
智識收得の冷淡……
完全なる準備……
勝敗は最後の五分間……
適當なる機會の捕捉……
失敗者の犧牲……
注意すべきは失敗にあらず……
長袖者流の駄洒落耳……
七轉八起の勇……

▲人生慰安の本源……一三五
何をか人生の歸趣とすべき？……
現代は物質文明の權化？……
不斷の努力……
人生最高の理想……
▲青年は須く斯くして世に處せよ……一四一
凡そ己れの職業に趣味を有て……

明日を頼むな今直ぐ爲せ……
時は金なり……
貯蓄思想の養成……
日々の交際には眞心と禮儀……
平凡は眞の偉大なり……

▲人生の禍福……一七

禍福の岐るゝ道……
幸福は艱難より生るゝや……

逆境は成功の母なるや……
禍福は自己の心に存す……
逆境に陷つた青年の實例……
人生の幸福到る處にあり……

▲青年の模範的處世振……二七

境遇は機會を生む……
夫は自ら助くる者を助く……
努力は最後の五分間……

▲其敏腕を恃む勿れ……二三七
此誘惑と此墮落に見よ……
覺めたる時は既に跡の祭……
自殺の刹那に一大光明を認む……
東奔西走奮闘努力……
腕を誇る青年の末路は是？……
▲須く是を熟讀し二省せよ……二五五

獨立自營の第一歩……
此三ヶ年の奮闘振り……
奮闘の第一歩にして凱歌を奏す……
積年の希望爰に貫徹す……
▲百難を排したる此奮闘……二七〇
發奮立志……
立志奮闘の賜……
嗚呼是れ何人か堪へ得る所ぞ……

品性の革命的感化……
凛然たる決心敢然たる勇氣……
此用意周到を見よ……
百方奮闘今日あるを得……
▲薄志弱行者の大教訓……二八九
機敏而かも奮闘的人物……
黒影！嗚呼暗黒の影……
肝膽相照す小さい實例……

飜然として覺醒す……
發奮の虎の卷……
是れ修養の賜？……
幸運は奮闘兒に與らる……
斯くして成功の第一歩に進む……
▲誠實勤勉是れ成功の基……三一六
苦闘を續けて大工場主……
蔭日向なく勵精す……

嶄新なる機械の發明……
一難經れば一難來る……
遂に其月桂冠を戴く……

目次（終）

立志
立功

七轉八起

高橋北堂著

◈吾人は奮鬪し努力せざるべからず

近時吾人の慾望著しく增大を來し、無限の慾望を充足せんと欲するに至りたるが、爲めに成功熱は頗る勃興を來したのである、而して之れに伴ふて所謂奮鬪的生活の必要を唱ふるもの

甚だ多くなつたのであつて、彼の前米國大統領ルーズベルト氏の如きは、其の最も華々しき奮闘生活主張者の一人である、何人も彼の如き世界的奮闘を有すを以て、快とせぬものはないのであつて、奮闘生活こそ眞に人生をして意義あらしむるものである。

見よ近世倫理學の敎ゆる所は、人生の目的は最大多數の活動をなすにありと云つてある、是れ一面奮闘的生活の必要ある事を表はして居るものであつて、實に奮闘的生活は人生の目的とも云ふことを得らるべく、人生の本務と云ふことが出來るのである、從て吾人が先づ本書の卷頭に於て、此奮闘的生活を說く、所以である。

奮闘是吾人生存の意義也

抑も人類は何が故に奮闘せねばならぬか、卽ち生存の慾望を滿足せしめんが爲めのみである、若し夫れ人類にして飽食暖衣、敢て苦闘する所がなかつたならば、彼の沈滯せる下水の如きものであつて、其所に必ず何物かの汚物を生じ延いては病源の發生となるのである。

凡そ人類の歷史は奮闘の歷史である、國家の盛衰興亡も亦民

族の膨脹發展も、皆な夫れ然らざるはないのである。況んや個人の隆盛に於てをや、然るに世人は動もすれば平安なる生活を望み、靜謐の仙寰に幽居し以て其慾望の滿足せしめんとして居るのである、且つ又以て人類最高の根據として居るのである、今之を言を換へて云ふときは、人類の品位は勞働せざる所にあり、活動せざる所にあるもの、如く思考するのであつて、如斯は國家の前途眞に憂ふべきものである。

近時青年の思想を解剖して見るに、万難を排して惡戰苦鬪を辭せざるもの、是れ幾人かあるか、之れを其維新の初め國事に

奔走し、貧苦の間に奮鬪した先輩より云はしめたならば、一言痛罵して、現代の青年には活氣充滿せる奮鬪心に缺乏せりと云ふのであつて、吾人は確かに不當の言にあらざる事を信ずるのである、之れ都會に於ける青年學生に見るに、數年前に於ては苦學身を以て立てるもの甚だ多かつたのであるが、今や眞に苦學生にして成功の域に達したるもの、曉の星の夫れよりも少ないのである、元より文明の進歩は万事をして分業的たらしめ、分業の結果は學問教育も亦專業を貴び且つ有効なるを疑はぬ處であるが、然し徒らに學術技藝の進歩のみに耽惑して、困苦に

養成せらるゝ品性の尊重ずべきことを忘るに至つては、遂に人間の氣力を失はしめ、やがては人類の墮落に終るのである。

吾人は彼の苦學奮鬪の間に成功したる青年に謝するものであつて、彼等は眞に社會の辛酸を嘗め、其の間品性を練磨し以て生存の意義を完全ならしめたものである、併し乍ら爰に一言注意すべきとは奮戰苦鬪するに當つて、飽迄も品性の高潔を支持することを要するのである、今之れを具體的に云つたならば、所謂武士的精神の存在を要するのである、孔子の所渴而不飲盜泉之水の一句を、深く肝に銘ずるにある、吾人は偶々世の苦學

する青年が、其窮極の餘り種々なる惡事を働いて、其甚しきに至つては、欺詐、竊盜を働くを耳にするに於て、啻に學生の面目を傷くるもののみならずして、實に社會の大賊なりと思ふのである、若し夫れ奮鬪苦學生中一人たりとも如斯き人物あらんか、さらぬだに卑下せられんとする狀態をして益々甚だかしらしめ遂に價値ある彼等の存在を失はしむ事なきにもあらずである。

羅馬國民たれ！羅馬國民たる勿れ

吾人は以上其逆

境に處して品性を高潔にし、奮闘せざるべからざるを述べたのであるが、尙順境に在る者と雖も、奮闘の必要なるや論を俟ざる處であつて、是等をして其境遇を維持せんと欲するならば唯に奮闘の一事あるのみである。

古來富豪貴族の子弟に寧馨兒なしとは、一般に唯ふる處であるが、是れ實に眞理である、世人は動もすれば逆境に奮闘すべきを說くも、順境に奮闘を必要とすることを說かざるの嫌ひ有るも、开は甚だ誤りである、逆境の奮闘は自然の理である、順境に奮闘せしむることこそ、眞に教訓に價するものである、吾

人の爰に奮闘を論ずるも亦其意味に外はないのである。

是を個人に就て見るも、之れを國家に就いて見るも、盛者必滅の理に制せらるゝ所以のものは、順境に奮闘あるを知らざるに基因するのである。

彼の平家の敗滅を見よ！ローマの廢頽に鑑みよ！唐の衰運に徵せよ！彼のシルトンの妙想ありとも、其不斷の奮闘が無かつたならば、彼の雄扁傑作は世に出でなかつたのであろう、又二ユートンの智力があるとも、多年の研究努力がなかつたならば彼の如く自然の妙理を闡明することは出來得なかつたであろう

働かざれば饑うるとは自然の告示である、例へ逆境に處すると雖も、其奮闘を缺くに於ては、心靈も饑え、德義も饑え、又身体も饑ゆるのである。

無には無を與へよ！

とは是れ大自然の法則である、惰者の氣力なくたゞ茫然として居るのは、是れ即ち大自然の眞理であつて、決して不思議はないのである。

我等は働かざるべからず、常に奮闘努力を要す

とはローマ王「セエラス」の遺言であつて、眞に千古の明言である、ロームの強大は羅馬國民の勞働の賜である、努力奮闘の結果である、而してローマが一朝にして衰殘したる所以のものは、國民の泰平に慣れて其精神が腐敗し、順境に處して彼等の努力を缺き、勞働を賤しみ、体力が次第に衰弱したるが爲めである、ローマの歴史を讀むるもの、彼の勤勉尚武の國民が、一朝にして奢侈懶惰の民と化し了りたるもの、誰か慄然として恐れざるものやあらん。

但人をして益々發展せしめ、國家をして愈々隆盛ならしむるもの、是れ順境に奮闘するにある、平時兵を談するにある、人

類は戰爭が其常態であつて、平和は即ち其變調を爲すものなりとは、戰時國際公法を論ずるもの、常に口にする處であつて、是を社會の狀態に見るも、確かに一面の眞理たることを失はぬのである。

奮鬪の源泉は是！

奮鬪の堅要なる實に名の如し、然るは其奮鬪の源泉や如何、是れを持續するの方法や如何、是れ最も吾人の研究を要する一大問題である。

奮鬪の源泉は高尙なる希望である、是れを支持するものは旺盛なる氣力である、氣力の維持は健全なる身體である、而して是れを涵養するもの實に是れ偉人傑士の奮鬪史である。

高尙なる希望、高潔なる理想なくしては誰か奮鬪せん、充滿せる氣力伴はずして誰か奮鬪を持續し得べきや、偉人傑士の奮鬪史と囁くあれば、半宵尙睡るを忘るのである、特に青年時代に當つては、最もよく身體的活力に富み、社會に立つて何事をか爲さんと欲し、又何物にか感化せられんとするのであつて此時に當り胞に高潔なる希望を抱き、身に旺盛なる氣力を藏し手に偉人の奮鬪史を携へ、勇往邁進したならば、世に悲觀なく

哀雲なく、只見る彼岸に青雲薫する成功の樂園有るのみ、人は働いて身体の疲勞がある、働かずして精神の煩悶がある、働いて身体の疲れを催すの時、成功を夢みて眠る之れに勝るの快事やあらん、吾人は古人の奮闘史を愛讀せねばならぬ、偉人の奮闘法を悟らねばならぬ、凡て此等のもの一として吾人の心氣を沸かしめざるものあらんや、奮闘の價値をして益深く感ぜしめ、吾人を成功に導く唯一の道程でるあ、口に哀詩を誦し、胸に女々しき戀を宿す、曷んぞよく未來の活動を期することが出來得やうか？

奮闘的生活の權化

吾人は以上奮闘の必要を說く、尙本編を終るに際し、奮闘的生活の權化たる、米國前大統領ルーズベルト氏の奮闘的理想を紹介せんと欲するのである、蓋し氏は歐米人の理想的人物の權化として欽仰せらるるもの、之れ氏の人物、性行、乃至言論が渾身皆是れ、奮闘的勢力、奮闘的態度、奮闘的理想を以て充滿せらるゝが故である、氏の奮闘的人格論に云ふ。

余の說かんとする處のものは、無事安逸の敎訓にあらずして奮闘的生活の敎訓である、換言すれば努力奮闘の敎訓である、

人生最高の成功は無事安逸を希ふもの、上に來らぬのであつて危險を恐れず、困難苦勞を厭はず、進むを知つて退くを知らざる人にして、始めて光榮ある最後の勝利を博するのである、彼の懶惰にして、安逸を喜ぶ如きは偉大なる事業を追究するの希望と、勢力とを缺きたるの徒輩である、此の如きは個人としても、將た國民としても三文の價値がないのであつて、安逸平和は人生最後の目的でなく、人間は夙夜に自ら勤勉し、且其小兒を敎育して、又能く勤勉ならしむるにある、既に富みて人の人たる道を踏めるものは、其小兒を戒めて懶惰放逸に時を送ること

となからしめねばならぬ、若し衣食の爲め勞働するの必要がなかつたならば、何ぞ去て文學、科學、技藝、歷史さては各種の探險等の如き、報酬なき事業の上に、其勢力をして傾倒せしめざる、此の種の事業は我が米國の社會國家に取りて、最も必要を感ずるのである、苟且なる安逸を希望するの徒は、共に語るに足らぬのであつて、余は勝利を期して奮鬪努力なるものを稱讃するのである、人間は其隣人學友に對して信義を厚ふし、活世界に處して成功を博するに必要なる所の、大丈夫の資格を養成せねばならぬのである。

人生最高の成功は無事安逸を希ふものゝ上に來らぬのであつて危險を恐れず、困難苦勞を厭はず、進むを知つて退くを知らざる人にして、始めて光榮ある最後の勝利を博するのである、彼の懶惰にして、安逸を喜ぶ如きは偉大なる事業を追究するの希望と、勢力とを缺きたるの徒輩である、此の如きは個人としても、將た國民としても三文の價値がないのであつて、安逸平和は人生最後の目的でなく、人間は夙夜に自ら勤勉し、且其小兒を敎育して、又能く勤勉ならしむるにある、既に富みて人の人たる道を踏めるものは、其小兒を戒めて懶惰放逸に時を送ること

となからしめねばならぬ、若し衣食の爲め勞働するの必要がなかつたならば、何ぞ去て文學、科學、技藝、歷史さては各種の探險等の如き、報酬なき事業の上に、其勢力をして傾倒せしめざる、此の種の事業は我が米國の社會國家に取りて、最も必要を感ずるのである、苟且なる安逸を希望するの徒は、共に語るに足らぬのであつて、余は勝利を期して奮鬪努力なるものを稱讃するのである、人間は其隣人學友に對して信義を厚ふし、活世界に處して成功を博するに必要なる所の、大丈夫の資格を養成せねばならぬのである。

失敗は苦痛である、然れども成功せんが爲めには、其手腕を試みざるものは一層不可である、苟も生を天地覆戴間に受くるもの、奮勉努力に待つの外、一も我等の頼むべきものはないのである。

人間生活上最も健全なる狀態は、男女を問はずして其身を處すること、最も勇敢にして潔白なる場合に於て、僅かに其存在を認むるのである、奮勉努力して安逸を求めず、困難を避けずして却つて之れに打勝つの習慣を養ひ、勝利を勞苦と危險との間に、獲取するの意氣ある人物にして初めて健全なる生活狀態

に立つことが出來るのである。

幸福なる國民とは光榮ある歴史を有するもの、謂である、彼の勝利を知らず、失敗を知らず、曖昧模糊の間に彷徨して、快樂苦痛共に苦しき經驗なき憫れなる狀態に居らんよりは、假令失敗の爲めに障害を受くるが如きことがあつても、光榮ある勝利を博するが爲めに、大事を敢行するに勝つて居るものとせねばならぬ、我等にして眞に偉大なる國民たらんと欲するなれば世界に立ちて大事業を爲すの決心がなくてはならぬ、我等は大問題に遭遇することを辭してはならぬ、只之れに處するに當つ

て我等の覺悟すべきとは其の成敗の由りて分るゝ點のみである

千八百九十八年米西戰爭が、將士に其端を發せんとするに際して、我が米國の之れに對すべきの道は、戰爭に畏縮すること懦夫の如くなるべきとか將た大膽勇敢に之れに處すべきかの二途あるのみである、一度事に當つたならば敗北か勝利か、國旗は必ず其二者の一を冠すべきである、懦夫や、懶惰漢や、其の祖國を重ぜざるものや、文明度に過ぎて堅實なる奮鬪的努力性を失ひたるものや、無智蒙昧の族や、暗愚にして國家に對し進取向上の觀念なきものや、凡て是等の人物は云ふまでもなく、

國民としての眞職分を遂行せんとするものあるを見て戰慄せねばならぬ、我等の必要なる陸海軍を具ふるを見て戰慄せねばならぬ、殊に我陸海の勇敢なる軍人は、彼の山水秀美なる熱帶國の一大島より、西班牙國旗を逐ひ拂ひて、紛雜の社會に秩序を確立し既に世界的事業の一部を成就せるを見て戰慄せねばならぬ、是れ等の徒は奮鬪進取の生活を恐れ、個人として將た國民として奮鬪不屈の特性を薄弱ならしむるのである、離促遁世の生活を可なりと信じ、信實に偉大なる國民の要素を具備せんと努めずして、國民的生活上最も卑しむべき征利の觀念にのみ、

驅らるゝの徒輩である云々。

雄辯家として一方の旗將たるルーズベルト氏は處々に於て右の言論を發表して居る、然り彼素より徒らなる口舌の人でなく其言論は必ず實踐躬行して居る、而して彼の讀書を遊獵とは、是れ實に彼れの心身に其の奮鬪的熱血を供給するの手段なりと聞いて居る、斯くの如き人物眞に是れ現代青年の理想とすべきではあるまいか。

◆現代は思索よりも實行の時也

現代文化の傾向

今は思索よりも實行の時代であつて之れに關しては浮田博士が曾て吾人に敎へてゐる、博士の曰く彼の理想の國家に於て實業階級を最下等に置き、武人をこの上に置き更に學者をして最高等の地位に置いたのは、希臘時代の理想とは相違なかつたが、現代文化の理想とする處とは、正反對の理想と云はねばならぬ、知的生活を最も重んじたる希臘人は、思索の生活を以て最も高尚のものと考へたのである、彼等の想像する處によれば、人間以上の神の生活に於ては、人間万事一として爲すに足るの價値なく、

神として最も適當なる生活は、唯に宇宙の眞理を思考するにあるのみと思つたのである。

然れども近代文化の理想とする處は全く之れと異つてゐる、學者が單にその智識慾を滿足せしむるが爲めに万卷の書を讀み古今の學識に通ずるも、人間生活の理想より之れを觀察すれば肉体慾の滿足に耽るものと大なる相違はないのである、故に獨乙の碩學ヘルムホルツは、人として生活に足るの價値ある生涯は獨り實行に有り、故に人は其智識を實際に應用するか、若くは科學の範圍を擴張するを以て目的となさざるべからず、蓋し

科學の範圍を擴張するは實に人類進歩の爲めに、活動することなればなりと云つて居る。

又古代の希臘人は、己れを知るを以て智識終局の目的となし其方法は專ら哲學的思索による傾向を表はして居つたが、現代の文化は自知の手段は專ら實行にあることを力説することになつて居る、カーライルは此世界に於ける最後の福音は、汝の職業を知つて之を爲すにありと云つた。

斯くの如く現代文化の傾向は思索の生活よりも實行の生活を尊重し、希臘時代の理想を一變せしむるに至つて居るのである

現代の文化は決して學者及び軍人の生活を上位に置き、實業の生活を下等に置くものでない、寧ろ其反對にあると云ふことが出來るのである。

倫理的人格平等觀

古代の希臘羅馬に於ては、自由人民は軍事と政治とを專務となし、一切の勞働を奴隷人民に委ねたから、一般に勞働階級を輕蔑するの傾があつて、商工業に從事するものを自由人民中の最下位に置いて、又た中世の歐羅巴や我が維新前の社會は、即ち封建階級組織の時代であつて、武士に戰爭、僧侶に學問、平民は勞

働を事とし、而して平民階級は國務に參與するの自由を有たなかつたので、勞働は矢張り平民のすこると、して輕蔑せられたのるある。

現代思想は奴隷制度又は封建階級制度を打破したから、今日の標準は人間万事社會の共同生活に益することは、如何なる賤女の手仕事でも、又た如何に他人の厭がる糞掃除でも、宮中に奉任する女官や、一國の政務を掌る國務大臣も道德價値に於て一切差別がない、何れも社會の爲めに必要にして何れも人間として爲すに足る貴い仕事である。

現時の生活戰場に立つものは先づ此の平等觀に立脚すべきである、如何なる職業にあつても、自ら常業の位置輕賤の職業にあるものと思つてはならぬ。

これは丁度戰場に出で、自分は敗軍の場合に立つてゐると思ふ兵士の如く、未だ鋒を交へざるに士氣既に沮喪して居るのである、如何なる軍隊に屬し如何なる部將の下にあつても、自分は正義の軍に屬し必勝の戰をなすものなりとの、覺悟がなければ決して王者の論と云ふことは出來ぬのである。

現代の名譽ある戰士は假令如何なる帝王、如何なる大元帥の

前に立つても、自ら下劣なりとして敬禮を爲すのではない、自己の人格を尊重し自己の任務を神聖とする故、帝王、大元帥に最敬禮するのである、帝王は人民の父母、元帥は兵士の練累、帝王の尊きは人民の尊き故、元帥の貴きは兵士の貴き爲めである、人民が賤しければその上に立つ帝王も賤しく、兵士が卑しければ之れを率ゆる元帥も亦卑しい譯である、この論理的平等觀を体得することは、現代の新戰場に立つもの、缺くべからざる必要條件である。

組織的活動の能率

併しこの平等觀を体得するのみでは片輪である、同時に人は能力及び其效率の大差あることを自覺せねばならぬ、人間の職業は正當の職業であるなれば道德的價値は絶對平等であるが、人の能力が不平等である處から、その能率が人に依つて一樣でない、或る意味に於て人間は天性平等だが、その能力は不平等である

例へば人間何人と雖も其耳目口鼻のないものはないが、聽覺視力其他五穴の作用に鋭敏遲鈍の差あること甚だしい、その五穴の作用ばかりでなく、記憶、想像、思想、感悟、人皆之れな

いものはないが、その能力の强弱大小は万人は万人皆違つて居る、一人として平等なものはない、從つてその社會及び團体に與ふる效驗が、その能力程度の異なるだけそれだけ一樣でない同じ軍人でも或る者は大將に適任の能力を有するが、或る者は單に一兵卒として大將の指揮に從ひ、始めて效驗ある働きを爲すことが出來るのである。

戰爭の目的から云へば、大將も兵卒も共に軍隊に缺くべからざる要職であるから、大將は貴く兵卒は賤しいと云ふべきものでない、道德的價値は大將も兵卒も平等に貴いけれども、その

能率から效驗から云へば大將になり得る人は少く、兵卒になり得る者は多いのである、故に大將と兵卒とは共に是れ國家の干城たる點に於て平等で貴賤尊卑の別はないのであるが、その職分に輕重難易の區別があるのである。

故に大將の才能ある人は進んで指揮を爲し、兵士に適するものは甘んじて大將の指揮を受け、喜んでその任務に服さなければ、決して戰勝を得ることは出來ぬのである。

これと同じ現代の組織的活動は政治上に於ても、組織上に於ても將た學術上に於ても、各自能力の程度に相應し分業協力することが必要である、産業制度に於ても指揮監督をなし得る將校も、指揮監督を受くる兵卒に似たるの差別がある、而して監督者の指揮命令は嚴命公平であると同時に、その下に從事する作業者は忠實に服從し、二者の干係は腦髓と四肢五体との如くなければならぬ、之を組織而活動といひ、こが活動の有效なる働きを能率といふのである。

この組織的活動の能率を高くするには、教育が必要であり又修養が必要である、單に勞働者となるには左まで教育を要しないが、指揮監督をなす人は多年の教育と經驗とを要するから、

自然其報酬も高い譯である、而して監督者にも勞働者にも共に道德的修養が肝要である、現代の文明的活動は皆なこの類で單獨孤立なるはなく、實に複雜を極めたるものである。

一の業務に從事するものは軍隊に比すれば將校兵卒の干係のそれの如く、今之れを有職譬に與ふれば、四肢五体の如くなつてゐる、故に一の業務に從事する監督者と勞働者との間には、軍隊の將校兵卒間に見る如き信賴敬愛の念が成立しなければならぬ、又た種類を異にする諸職業は從事する人と人、若くば會社と會社との間にも信用を重んじ契約を守り、相互に大仕掛の

分業協力をなし得るにあらざれば、決して效驗ある社會的又た組織的大活動となすことは出來ぬ。

學校で云へば校長以下各教員間及び彼等と生徒間に同樣忠實敬愛の心が成立しなければならぬ、校長の任務獨り貴く、教職員の作業賤しいといふ道理はない、況んや教職員に比して生徒は劣等なりと云ふべきものでない、人間社會の活動は皆な然りであるが、特に現代生活の新戰術はこの道理を自覺し各自是を身に實現する覺悟を要するのである。

此眞理を自覺せよ

現代生活の新戰場に出でんとしつゝある青年は、以上述べたる眞理を自覺することが薄弱であつて、此眞理に對する確信が充實しないが爲めに、薄志弱行の譏を免れないのである、彼等の或るものは人格の平等觀のみを理解し未だ經驗足らず、見識備はらざるに獨り自ら高しとなし、若しくは獨り自ら智なりとして、容易に命令に服從せぬのである、例へ服從しても完全に命令の趣旨を徹底せしむるまでに努力しない弊害があるのである。

又彼等の或者は自己の人格を尊重せず猥りに卑下して指揮監

督者の歡心を求め、一時成功すれども何時しか自他の人格を無視するやうな事を敢てし忽ち失敗を招くのである。

人は如何なる位置境遇にあつても、自己の人格を犧牲に供してはならぬ、義俠心にかられて財產を失ひ、名譽を失ふことは構はぬが、君の爲めであらうと父の爲めであらうと、自己の人格を犧牲に供することは出來ぬ、例へ君父の意に背くとも良心の命令、道德の法則に背いてはならぬのである。

併しながら指揮監督の命令が正當である場合には、兵卒が將校の下知に從ふと同じこと、完全且つ絕對に服從をするのが協

同生活の原則である、止むを得ずして斯く爲すのでなく、喜んで之れを爲すのが作業に從事するもの丶本分である、即ち各作業者の人格は、道德上神聖にして彼等が爲す作業の道德的價値は平等に尊貴である、けれども各作業者の智能及び經驗は千差万別であつて、之れを平等視する譯には行かぬのである。

之を平等視するは本來不平等なものを、平等視することで、その不公平不正義なること、元來平等なるものを不平等に取扱ふのと同じことである、各作業者は平等に自他の人格を畏敬すべきである、この自尊心の指揮監督者に缺くるときは、その命

令が不正又は尊横になる、又たこの自專心が勞働者に缺くるときは、監視者の居らぬ時、又は處に於て必ず怠慢懶惰に有る、斯くして作業の能率を滅殺すること甚だしい斯〻の如き人物は監督者としても、勞働者としても決して成功するの筈がないのである。

最後の勝利は卽是？

すべて勤務は道德上神聖が貴賤尊卑の別はないのであるで、凡ての作業には難易の差がある、又た各作業者の位置は平等に高貴なものであるけれども、その作業の難易あるから位置にも輕

重があり、之を階級的に組織する必要があるから、その難くして重き作業を上と稱し、その易くして輕きものを下と稱するけれども、今日上下の二字には貴賤尊卑の意義はないのである。

譬へば貴族院を上院と稱し衆議院を下院と稱するが如きものである、これは封建時代の遺風に基いた名稱に過ぎないのであつて、今日では貴族院も亦衆議院も共に神聖なる議會の一部分である、即ち一を貴くし他を卑しく思ふなれば、それは大なる誤解とせねばならぬのである。

現代の生活戰場に立つ者は、明白に其人格の平等觀も而して

能率の差別觀とを識別し、之れをして混同せしめぬ樣に自覺し又た確信せねばならぬ而してこの自覺と確信とに立脚して勇往邁進し、奮鬪努力する者には必ず最後の勝利が來るのである。

◈須く空想を排し理想に生べし

理想と實現との調和

理想とは何ぞ吾人が現實を離れたる或る事物に對する完全なる思想の作用である、故に文學者は是をして美しきもの、懷かしきもの、望ましきものとして常に憧るゝ處である、然らば

即ち現實とは何ぞ、吾人が目前經驗しつゝある事實にして、一部のものは樂しく、懷しきものなれども、概しては苦きもの、辛きもの、酸きものに屬す。

吾人は常に此理想をして胸に描くの自由を有するものであつて、失意不滿の間にあつても、尙ほ喜々快々として活動するの勇氣は、即ち一に此理想に依つて生ずるのである、若し不幸にして吾人が理想を胸に描くの自由を剝奪したらんには、人類は高等動物としての觀念を失ひて、禽獸に化し了るのであろう、只現實の感覺のみに終らしめたならば、吾人の腦には理想の權

化なく、其所に進歩なく向上なく、奮鬪あることないのである故に世に處せんと欲するもの、理想と現實との干係を見ねばならぬのである、果して然らば卽ち理想と現實との調和に就ては如何なる態度を取る可きものであるか、吾人は常に目を理想の天地に注ぎ、足を現實の境に立てねばならぬのであつて、之れをして宗教と云はしめたならば、理想は天國である、現實は現世であると、吾人は現世よりもより美しき天國に達すべく、奮鬪もし、修養もし、又活動もするのであるが卽ち現實のみあつて理想あることなかつたならば、何ぞ奮鬪するの要やある、何

を修養するの要やある、吾人が修養するも又奮闘するも、只理想の境に到達せんと欲するの觀念あるのみである、見よ青年が成功せんと欲して努力奮闘するも、彼の百万の富を積みて尚節儉を守り、孜々として勤勉するも一に是れ、理想の富豪たらんと欲するのみであつて、吾人の理想は永遠に窮極する所なきものである。

然らば此理想と空想との差異如何、空想は到抵吾人の達し得ることの出來ざる病的觀念である、例へば大海の水を呑み盡さんと欲するが如き是れに屬するものである、之に反して理想は理

想其ものには達し得べきものにあらずとも、曾て描きし理想は之れを實現するの道あることは万人の認むる處である。

處世の要訣は理想を主眼とせよ

吾人は處世の要訣として、現實を主眼とすべきか、將又理想を主眼とすべきか、其取る所に依つて即ち理想派と現實派との區別を生ずるものであつて、現代の青年は概して理想派に傾き、老人は多く現實派に與みし易いのである、元より兩者各々一長一失あつて一概に論定することは出來難いのであるが、然し最も安全なる成功策として

は、即ち現實派を押さざるを得ないのである、殊に現今の如く社會組織の完備せる時代に於て然るのである。

惟ふに吾人の胸に理想を描しはそれ單純なる心意の作用である、故に之れをして下級より上級に進むるは、極めて自由自在に屬するのであつて吾人は比較的下級の理想も、之れを實現するに於ては之れが成功に伴ふの快感を生ずるのである、而して此快感こそやがては高尚なる第二の理想に向つて進むこと唯一の好刺戟劑である、總ての快感は其如何なる些少の事柄と雖も其理想を達する時に於て、必ず之れに伴ふものである、高尚な

る目的に向つて更らに進行するの唯一なる資料は、即ち此快感であるのである、之れに反して徒に理想高く所謂大言壯語あるものは、一朝其蹉跌を生ずるの時、元氣は爲めに阻喪して次第に其理想を低下し、其間常に不快を萎縮との度を增し、從て益々活氣を喪失せしめ、萎靡せしむるものであつて、其の優劣言はずして明である、然れども爰に注意を要すべきは、徒らに現實主義に拘泥するの時、餘りに現實を尊ぶの弊を生じ、万事消極主義となり、進んで經營畫策する事なきを恐るゝのであつて、これを救ふは一個の冒險的精神として、其の養成とは膽

力の修練と偉人の事蹟とを研究する事大切であるのである。

今や生存競爭は日一日として激甚なるに伴ひ、理想を說くものを笑ふもの多く、例へ之れを笑はざるものと雖も其耳を傾けざるもの甚だ多きを加ふるに至つたのである、之れを文學に徵するも、之れを宗教に見るも、現實生活の悲哀を說いて理想生活の趣味あるを論ずる者や少し、是れ果して喜こぶべきの現象なるや如何！

空想是病的思想の產物？

彼の獨乙は極端なる理想國を以て知られつゝある

のである、經驗よりも理論を重んずるの國である、之れに反して英國は極端なる現實主義の國である、何事と雖も一に實際を主とするの國である、然らば即ち此二者が二十世紀に於ける活動の狀態果して如何であるか　吾人敢て之れに斷案を下すことなしと雖も、少くとも徒らに現實主義にのみ拘泥するは吾人の取らざる所である。

若し夫れ才氣縱橫、活力は其全身に充滿し、膽力衆人を壓するの概ある大丈夫に至つては、元より些々たる現實に囚はることなく、一大理想の實現に經營規畫するは當然の事に屬するの

であるが、只爰に注意すべき處のものは、理想を愛するの極、現實を怠りて不當の望みを懷く、所謂空想は絶對に之を排斥せねばならぬのである。

之を要するに現實は即ち進歩の階程であつて、理想は進歩の目標である、而して空想は一個の病的思想の産物に過ぎないのである、成功に導くべき方法としては即ち目的の確立と、階程の堅固なるとにあつて、之を損ずるものは實に空想的思想である、即ち無爲にして莫大なる效果を得んと欲するもの、戰はずして戰勝の結果を得んと欲するもの、實に民をして墮落せしめ

國家をして衰滅せしむるものである、現代青年は須く其空想を排して理想に生き、堅固なる階程に依つて確立したる目的に進み不斷の努力を試みねばならぬのである。

◈自主と！自立と！

現代青年の任務

國家の柱石として、國運の隆盛を期すべき大任を有する者は、果して誰であるであらうか、今や舊套を脱して新時代に入るの時、新進氣鋭以て國家を其の双肩に擔ふべき者、果して何人に屬するで

あろう？

衆に先んじて其學を修め、其德を磨き、其業を勵むものは、即ち是れ現代青年の急務であらねばならぬ。

凡そ國家を維持し國家を進歩發達せしむるには、創業と守成との二要素に待たねばならぬのであるが、創業には活達、敢爲勇往、邁進の鋭氣を發揮することを要し、守成には堅實、沈着愼重、自疆の用意がなくてはならぬ、併し活達なるものは輕佻に流れ易く、邁進なるものは虎暴の勇に傾き易く、沈着なるものは因循に陷り易く、愼重なるものは姑息に趨り易いものであ

るから、彼の山岡兵部の所謂『いざさらば冥土の鬼と一と軍』と言ふが如き勇氣は、固より是を必要とするのであるが、能く其の陷り易きの弊を知り、創業守成二つながら全きを致すのは即ち現代青年の任務であらねばならぬ、何となれば過去の國家は吾等の祖先に依つて發達進歩を促し、以て現代の國家あるに至つたものであつて、吾等は實に祖先の延長に外ならぬのであるから、從つて現代の吾人は過去の祖先の儀範に學び、祖先の創業を守成すると共に、又た新たなる儀範を後代に傳へ、更に創業を將來に貽さねばならぬのであるから、現代の吾人は即ち

又た後代の先驅である、故に吾人は獨り吾人の爲めに生存するものでなくして、祖先及び子孫の爲めに生存し、現代は獨り現代の爲めに活動するものでなくして、實に先代及び後代の爲めに活動しつゝあるものである、此意義に於て現代の青年、創業と守成との二要素に向つて奮鬪する處なかつたならば、其奮鬪は即ち自我に陷り、自我は利己に流れ、私慾私利の外眼中何物もなきの弊を招くの慮あるに至るのである。

精神一到金石亦た透る

抑も自我と云ふことは、何事にも自己を本位として利

害を割り出し、他は之を顧みるの念慮なく、利己の爲めに自利の爲めには、他人の福利を奪ひ公益を害して迄も、私慾を敢てし私腹を肥さんとするものであつて、國家社會の禍患之れより甚しきものはないのであるが、之れに反して自主とは、他人の力を待つことなく他人に依賴する處なく、自己の獨力を以て如何なる難事をも之を遂行し、如何なる偉功をも奏すべき自信力の鞏固なるを云ふのである、而して此難事たり偉功たるものは、決して自己一人の私利私慾の爲めにするにあらずして、固より國家公益の爲めたることは論を俟たない處である、斯くて

一心不亂に自主自立の精神を以て其志す所に向つたならば、精神一到金石も亦た透るのである。

尤も爰に自主自立と言ふことは、自主獨立のことを云ふのであつて、彼此の所謂獨立は彼の孤立の謂ではないのである、孤立とは他人より除外せられ、社會公衆より排斥せられて國家の間に身の置き處ない處のものを云ふのである、之れに反して自主卽ち獨立とは、他人公衆の力を藉らずして、自己の一身に國家社會の重きを擔ひて立ち、如何なる大事をも物ともせざる確乎不拔の精神を以て、天下を獨歩するものを云ふに外ならぬの

である。

志は須く高尚遠大なれ

人として此世に生存する以上は、皆各々其希望のないものはないのであつて、其希望は卽ち志である、志あつて始めて勤勉を生じ、勤勉に依つて成功を期し得らるゝのであるから、志を立つると云ふ事柄は、實に成功不成功の岐るゝ所であつて、人生禍福の分岐點である、若し吾人にして何等の希望もなく、何等の志をも定むることなくして、終日終夜唯だ怠眠を貪るに過ぎざるものありとすれば、假令富貴の身なりとも

其の人は僅かに動物的生命を維持するに止まつて、眞に人として、將た國家構成の一分子として、又社會の一分子として、全く一顧の價値だに有せざる死物なりと云はねばならぬのである故に吾人は先づ必ずや其志を立て、一意專心其業務に忠實でなければならぬ筈のものである、而かも其志たるや高尚にして遠大なるを要するのであつて。

青年高きを望まざれば、必ず低きに俯す、
精神の意氣の天に飛冲せざるものは必ず地に匍匐す、

とは彼のヂスレクーの敎訓にあるが如く、千を望んで百を得

らるべく、又百を望んで十を得るに至るのであるから、志は須らく遠大なるを尙び、同時に又高尙でなければならぬと云ふは沒趣味殺風景なる不幸なる生涯を送るの人は、其志の野卑なるが爲めである、艱難の中に慰藉あり、暗黑の中に光明あるを見るは、實に其志の遠大にして且つ高尙なるに依らねばならぬのである。

併しながら唯だ其の志のみあつて、之れを行はざるに於ては、又た何等の成業をも見ることが出來ぬのであるから、乃ち勤勉力行の立志に次いで起る所の要件である、況して人生は草

の葉に置く朝露の、待つ間あらせず消え行く跡の儚なさにも似て、宛然是れ蜉蝣の憐れさにも等しきものであるから、如何でか其瞬時だに油斷の出來得べきや、光陰は人を待たず、一日は再晨なり難し、若し夫れ春の花に戯れ、秋の月に遊び、盛暑と嚴冬には休養を名として、徒らに日月を費すことがあつたならば、一年四季の間何れか勤勉力行するの時やあらん、一年又一年、遂には生涯の間に何等成す處なくして終るに至るのである是れ實に殘念至極の事であつて、敢て明日ありと云はずして、今日の一日に全力を注がなかつたならば、臍を嚙むでも及ばざるの悔あるに至るべきは、蓋し必然の事理なりと云はねばならぬのである。

鞏固なる自信力

自主自立の精神を發揮して、立志力行するに當つては、專ら鞏固なる自信力に待たねばならぬのである、何となれば自ら志す所の一事を成し、又た自ら志す處の一業を遂けんとするは、即ち自己である、自分であるのである、自分でなくして誰が其の事を成し、其の業を遂ぐる者が他にあるであらうか、固より成功も自己にあれば、失敗も亦自己にあり、幸福も禍害も皆自己に依

つて招くのである、徒らに虚傲にして外面を飾る者は、人を欺くと共に又た自己を欺くものである、自己を欺く處のものにして自己の志す所を成し遂げ得ざるは論ずる迄もないのである、既に自己を欺くと云ふことは、自信力の欠乏によるのである、自己を信ずる處なくして、自己の欲する所を爲し遂げんとするは、是れ恰も木に椽つて魚を求むるの類に過ぎぬのである、蓋し木に依つて魚を求むるは、唯だ魚を獲ざるに止まるのである併し自己を欺く者は其の志を成し得ざる計りでなく、實に害惡を天下に及ぼす處のものである、果して然らば自信力の鞏固

なるものでない以上は、如何なる事業も亦成功することが出來ぬのである。

西人の言に『天は自ら助くる者を助く』と言へるの教訓があるが、即ち敢て他の力に依賴することなく、確乎たる自信力を以て、自主自立の精神を發揮するに於ては、國民の元氣は爰に充實し、國運の旺盛は期して待つてべきである、然り自主自立の精神を發揮して、其の志す所賢實なれば、艱難も屈する能はず、威武も奪ふ能はず、富貴も淫する能はず、人間萬事唯だ一志を以て成し遂ぐるに足るのである。

倦まず撓まず漸進せよ

古より絶大なる事業を成し、絶世の偉功を奏したるの人を見るに、未だ曾つて奇策妙法のあつた譯でなし、又た初より大才英智の人でもなく、凡人凡質凡智凡才の人にして、善く其偉業を成し遂げ得たる[illegible]以を考ふるに、唯夫れ己れを信ずるの鞏固にして、勇猛邁進、百折撓まず、千挫屈せざるによるのである、功は敢て急ぐを要するものでなく、龜の歩むこと遲々たるも、終には兎の疾きに勝てるの俗諺は、善く其實を得たるものである。

我が國青年の欽陷性は、奇を好み、物に移り、急躁にして激し易きが爲めに、堅忍自彊なり難く、熱烈にして冷め易きが故に、耐久不撓なり艱き點にある、大功は到底一朝にして成るものでなく、偉業は一夕の間に遂ぐるものでないのであるから、宜しく吾人の戒めて能く勇往邁進し、而かも能く堅忍持久しなければならぬのである。

若し夫れ堅忍ならずば輕佻に趨り、持久ならずば浮薄に陷るのは、世間滔々として皆然らざるはないのである、而して輕佻浮薄なる國民は、華奢を喜びて射倖を是れ事とし、懶惰に流れ

て貪慾を專らとし、私利に吸々として公益を顧みるの者がないなら、其國は必ず衰退滅亡に歸するのであつて、是れ實に古今東西其の例に乏しくない處である、故に一國の最も患ふる所のものは、武備の充實如何と云ふことよりも、貧富の度の如何と言ふ事よりも先づ其の國民の性行如何にあるのである。而して其性行の善惡たるや、之を外部より受くる制肘刺激よりも、國民各自の內心に於て其の獨を愼しむの遙かに大なるものがあるから、彼の加賀の千代女の『百生や蔓一すぢの心より』と言へるが如く、貴賤を問はず貧富を論ぜず、人生を唯だ一筋の心の

蔓に繫げる自主自立の精神を以て、自己の力に信賴し、恒久堅忍、其の業に專ならば、天下何事も困難なる筈はないのである古人の言へるが如く、石に立つ矢の例ありとは、即ち此專心堅忍の力を稱へたものであるのである、吾人が他日の成功を期せんと欲するなれば、須らく克く千難萬苦に耐へ、一忍以て百勇を支へねばならぬのである。

艱難是汝を玉にす

孟子曰く『天の大任を是人に降さんとするや、必ず先づ其の心志を苦め、其の筋骨を勞し、其の体膚を饑やし、其身を空乏にし、

行ひ其の爲す所に拂亂す、心を動かし、性を忍び、其の能くせざる所を增益する所以なり』と又ビーコンスフハールドは曰く『人の爲せしことは、我も亦爲し能はざるの理あらんや、余は奴隷にも非ず、又た捕虜にもあらず、願くば氣力以て困難に打ち勝つべし』と、若し夫れ逆境にある幾多靑年の輩、常に意を爰に致す所あるならば、敢て或は世の順境にある者を羨むの要あるなく、其の逆境にあるは天却つて幸を吾に降すものなるを思ひ、益々奮勵努力する所なければならぬのであつて彼の所謂『艱難汝を玉にす』との古言は、即ち此點を指示したるもので

ある。

◆精力の發揮と身体の錬磨

精力とは何ぞや

堅忍持久も精力である、不屈不撓も剛毅奮勵も亦精力に外ならぬものであつて、天地宇宙既に大精力の實在であり、吾人人類は此大精力を分賦せられて、生を此世に享けたものであるからして、人間生活の根本は即ち精力にあるのである故に精力の繼續は進化なりて現出し、文明は實に

其産物に外ならぬのである、斯くして天地宇宙の大精力は永久不滅であるから、之れを分賦せられたる處の、吾人人類の精力も亦決して消滅するものでないのである、然れば此精力を發揮し、此の精力を使用すること益々大なれば大なる程、其精力は益々加はつて盡くる處なく、遂には天地宇宙の大精力と合致するに至つて、又た神人歸一の域に達するのである。

尤も此精力は單に精力として存地するのみでなく、何等の光輝をも發するものではないのである、精力の全部を擧げて一業一事に傾注せんには、是非共強大なる自信力を要するのである

而して自信力は自主自立の精神より發するものであつて、他に依頼するの念があつたならば、決して其の全精力を發揮することが出來ぬのであるから、苟も自己の目的を貫徹するには、必ずや自己の精力に待たねばならぬのである、萬難を排して奮鬪し、左右を顧みずして一念邁進せねばならぬのである、此に於てか不撓不屈、倦まず怠らずと言ふことが、精力發揮の一大要素となるのである。

死而後已

孟子に『原泉混々として晝夜を舍めず、科に盈ちて而る後に進んで四海に放る』と見え、吉田

松陰の士規七則に第七に『死而後已の四字あり、言簡にして義廣し、堅忍果決確乎として拔くべからざるは是を舍きて術なきなり』と見えシエクスピアーの敎訓に

少さき斧も屢々擊てば、最も堅き樫を倒すとあるは、是れ等何れも皆精力の發揮を說き得て餘蘊がないのである、吾人如何でか天賦の精力を發揮せざるを得られんや。

そも〳〵吾人人類の生存と滅亡と、幸福と不幸と、繁盛と衰退とは一に精力の傾注如何に依るのである、即ち野蠻蒙昧より文明開化の今日あるに至つたるのは、克く天賦の精力を發揮し

て、人類の使命を遂行したる結果である、併しながら一時の盛榮と、一時の小康とを以て、是等の事既に成れりとするは、尙ほ未だ薄志弱行の徒たるを免れざると共に、到底精力の意義を解したるものではないのである、益々向上發展を期し、無限の活動努力を繼續してこそ、精力に價値あり光輝もあるので、若し驕傲に陷りて小成に安んじ、怠慢にして小康を甘んずるに於ては、固より天賦の精力を發揮することも出來ず、人類の尊き使命を遂行し得ざるは勿論のことであるから、之を一人としては社會の落伍者となり、國民としては其國を亡ぼすに至る者で

あつて、其實例は古今東西の史上に昭々たるものがあるのであるから、人類全般の幸不幸、一國盛衰存亡、社會の興廢消長、一家一人の禍福喜憂は、皆是れ精力を發揮すると否らざるとに因ることを自覺せねばならぬのである。

將た又た規律秩序と言ふ事は、精力を發揮する上に於て最も必要なる一條件である、若し秩序なく規律なく、雜然として區分を明かならしめざるの時は、如何なる簡單なる事業も、紛糾亂雜し、錯綜混淆して、精力を一念に傾注することが出來ぬのである。

向上發展と精力の傾注

左の如くにして本來を違へず、秩序を正して其精力を發揮するには、固より艱難に堪へて益々鍛錬し、良習慣によつて心身を養成し、不撓不屈以て助長せしむる處がなかつたならば、其精力は遂に隱くれて出でず、精力の隱れて出でざるに從つて、惰弱放逸なるもの次第に跋扈し、朝に一事に從ふも夕に之を抛棄し、難きに逢へば忽ち易きに向ひ、其の易きもの亦甚だ難きと見るに至つて、更に又方向を轉變し、生涯の間遂に一事一業を成功せしめずして終るもの、比々皆然るのである、苟

も向上發展を期し、其偉業を成就せんと欲するものは、其目的の事業に制限を置かず、無限に之れが進歩發展を期して、其全精力を發揮し、死に至る迄活動奮鬪を持續し、斃れて後に已むの覺悟がなくてはならぬのである、故に無限の活動を無限に繼續し、無限の努力を無限に奮ふ者こそ、眞に是れ精力主義の人と云ふのである。

尤も人間の精力は天地宇宙の大精力の分賦であつて、永久不滅のものたるに相違ないのだが、併し此の精力を無益に消耗し之を八方に分散せしむるの時は、到底何事をも成就することが

出來ぬのである、例へば連日連夜身を酒地肉林に投じて、無益に精力を消耗し、若しくは其志す所一貫せずして、是も一時彼も一時の弊に陷り、以て其精力を分散せしむる者には、古來果して何をか成就したものがあるか、故に常に精力は之を集注し、之を蘊蓄し、而して大に之を發揮するのでなかつたならば其向上發展も、事業の成就も、到底期すべきものではないのである、要するに精力の大小强弱は目的の成否如何を卜すべきものであつて、其の大小强弱は、又た一に精力の集注如何に依るのである。

身体の錬磨と精力の發揮

苟も人として此世に生存する以上は、須らく健康なるが上に、尙ほ且つ辛苦困難に堪へて畢生の精力を發揮し得る程の身体でなくてはならぬのである、從つて消極的には衛生を重んずべきは勿論、積極的には進んで身体の錬磨を積み、斯くて奮闘努力に堪ゆべき强壯体、寧ろ頑健なるを期せねばならぬ、而して身体の頑健は其勞働に堪ゆるものであるからアクーセッフエルが、

人生に於ては心身の勞働に依るに非ざれば、何物も結果を生

ずること能はず、努力して又た努力するもの、是れ即ち人生なり、と言ひ更にウスキンが、

汝若し智識を得んと欲せば、勞苦せざるべからず、汝若し食物を得んと欲せば、勞苦せざるべからず、汝若し精神上の快樂を得んと欲せば、勞苦せざるべからず、勞苦は人間世界の通則なり、

と言へるが如きは、即ち精力の發揮、奮闘努力の必要を說いたものであつて、逸樂せる肉体は其の精神に於て憐むべし、勞苦せる肉体は其の精神に於て最も幸福なるものであるのである

故に全精力を發揮することが出來、奮闘努力に堪ふるべく身体の錬磨を重ぬる内には、又た實に道徳上の重大なる意味が伴ふものであつて、身体の錬磨は單に身体の錬磨に止まるものでなく、其の錬磨は精神の修養に影響すること莫大であるから、衛生を重んずるは健康を保つの方法たるは勿論であるが、一方には又精神の修養に依つて吾人の徳を磨くのは、即ち心身兩つながら健全を期するの良法である。

然れば勞働によつて身体を錬磨し、衛生に依りて健康を保持すると、學習に依りて智徳を修養し、艱難に依りて精神を鍛錬

すると、互に相待つものであるから、身体の勞苦は心思を鍛錬し、心思の鍛錬は又た克く健康を保持し、以て精力を養ふ所以の良法であつて、精神が安泰、快活、剛毅でなければ完全なる身体の健康を期することが出來ぬのである、即ち精神と身体と調和せざれば、完全にして且つ愉快なる人生の幸福は得られぬのである、從つて長壽を保つ譯に行かぬのである。

勿論体力は必ずしも腕力を意味するものでなく、健康にして如何なる奮闘をも繼續し得べきものが、体力に於ける勝者であるから、体力の強大なるものは必ず健康であるけれども、健康

なる者は必ず体力に於て強大なりとは云はれぬのである、從つて腕力の強大なる者にも、亦た疾病あるを免れぬ譯であるが、体力強大で且つ精神健全なればこそ、無病臭災で、精力も旺盛であり、事に臨んで堅忍不拔であり、不撓不屈であり、勇往邁進であり、難に處して怖れず、禍に逢ふて悲まず、始終精力を發揮して事に當り業に勵み、斯くて最後の勝利を博し、名譽の月桂冠を頂くことが出來るのである、故に吾人は其の体力を強大にして無病健全を望むのであつて、而して柔弱なる氣風も、強大なる体力に依つて驅逐し得られ、雄大なる智德も、亦た健

強なる体力に依つて發達し得らるゝのであるから、健全なる体力は人間百行の基たると共に、又實に人生最大の幸福と云ねばならぬ。

健全なる精神と健全なる身体

健全なる精神は健全なる身体に宿るとは、頗る陳腐に屬する言葉のやうであるが、其の實は依然として最も新らしい言葉である、且つ最も新らしい教訓である、精神に於て強く、体力に於ても亦強き者は勝者の地位に立ち、精神に於て弱く、体力に於ても亦た弱き者は、常に敗者の

地位に立つは當然である、而して其勝者は常に精力の旺盛なる者に限り、其の敗者は常に精力の欠乏せる者に限るのであるから、身体も精神も共に强健なるものにして、始めて爰に全精力を發揮し得らるゝ次第である、雨注の彈丸を物ともせず、眼中是れ死生なく、雲霞の如き大軍に向つて、驀然猛進するもの、果して如何なる精力の國民たらん、千辛萬苦を物ともせず、眼中何等の難事あるなく、敢然として事に當り、猛然として水火中に奮迅するもの、果して如何なる精力ある國民ならん、其の偉業天下の耳目を聳動せしめ、其の功績世界萬國を震撼せしむ

る者、果して如何なる精力ある青年ならんか。

吾人は斯くして成功す

剛健雄大の心志

凡そ一事を遂げんとせば必ずや剛健なる心志の力を待たねばならぬのである、特に青年は剛健雄大なる資性を養ふて努力し、又た常に邁進向上の志氣を保持し、堅忍勇往する處がなかつたならば、柔弱因循に陷り、怯懦遂に爲すべからざるに至るのである、即ち其心志にして薄弱であつたならば、辛苦に堪へ艱難に勝つ

ことが出來ぬのである。即ち辛苦に堪へ艱難に打勝つことが出來ぬならば、天下夫れ何事をか爲すことが出來るであらうか。

即ち必志の力剛毅であつて始めて其百難を排し、萬苦を凌ぎ向上進取も邁往發展も、吾人の望む處に依つて得らるゝのである、且つ又邁往進取の志あるものは、事を行ふに神速果決であつて、ナポレオンの兵を動かし、秀吉の軍を進むるも皆神速にして敵する者がなかつたのである、蓋し神速を尙ぶは兵事のみでないのであつて、果決を要するは政務のみでないのである各人日常の業務行爲は、悉く然らざるものはないのである、併

しながら斷行の前には熟慮を要し、神速は之れを尙ぶに共に其輕卒を誡めねばならぬのである、尤も其熟慮は猶豫狐疑と混成することなきを要するのであつて、彼の狐疑は怯懦より起るもの、其怯懦は自己の心志を信賴せざるより生じ、自己の心志を信賴せざるが爲めに、遂に一事のなるなきに終るのである。

而して爰に注意を要すべきは、彼の英國の諺に『熟考と猶豫とは別物なり』とあるが如く、熟考と猶豫と月鼈の差があるのである、又謙恭と怯懦と、勇邁と驕傲とは、雲泥の差別があるのである、剛毅と粗暴とは亦た誤り易く、大勇は怯の如く聖人

は愚の如しと言はれるのであつて、要するに謙恭にして驕傲ならず、忍耐にして輕浮ならず、中庸にして過激ならず、剛毅にして粗暴ならず、寛弘にして偏曲ならず、其渾身の力を注いで吾人の志す處に猛進するならば、必ずや其成功は疑ひなき處である。

一忍以て百勇を支ふ

成功には曾て僥倖の伴ふことはないのである、又僥倖を望むものに曾て成功を得たるものはないのである、世に幸運と云ふことは僥倖の意味ではないのであつて、懶惰遊佚なる者が幸

運を望んだからと云つても、百年之れを待つとも曾つて得べき譯のものでない、幸運は獨り勤勉に伴ふものであつて、勤勉にして忍耐なる者は、其招かずと雖ども自ら幸運に接するのであつて、之れが即ち成功と稱せらるゝものである。

一忍以て百勇を支ふべく、一靜以て百動を制すべし、とは即ち蘇老泉の語であるが、此の一忍百勇を支ふることが即ち剛健の氣であつて、剛催の氣は器局の偉大なるを示し、之れに伴ふ處の勇邁の志は、よく膽力の大なるを表はすものである、故に宜しく吾人は其範を古今の英雄偉人に取つて、以て膽力を鍊

り、氣骨を鍛ひ、豪壯雄偉、堅忍自彊絶えず進取向上の實を擧げねばならぬのである。

克己は最大の勝利なり

剛健勇邁と云ひ堅忍自彊と云ふ、之れ要するに克己自制に待たねばならぬのである、何となれば克己にして堅忍たり堅忍にして剛健たり得るのであるから、彼のフランツは

克己は勝利の最大なるものなり

と云つて居るのであつて總ての困難を物ともせぬのが克己である、如何なる慾心をも之れを抑へるのが克己である、飲食を

攝するもの、奢侈を慎むのも、節約儉素を守るのも、心身四肢の勞を厭はぬのも、分を守つて度を過さぬのも、慷慨義氣あつて人を扶助するのも、安逸遊惰を戒めて勤勞精勵するのも、小成に安ずることなくして、大成を期しつゝ發奮努力するものも何れも是れ皆克己自制に待たねばならぬのである、故に獨逸の諺にも『辛く働きて甘く眠れ』と云ひ又ジミトリアスの語に『艱難を知らざる人より不幸なるはなし』と云ひ、王陽明は又『一蹶を經れば一智を長ず』と言へるもの、皆克己自制より來れる堅忍不拔の精神に對する箴言である。

世或は穎敏の才を以て克己に優ると云ふものゝあるは、其の優劣を顚倒錯誤したものであつて、克己堅忍の遙かに穎敏の才に優れることは今更事新らしく説明する迄もないのであるが、念の爲め其要を云へば、假令穎敏の才があつても、克己堅忍の剛毅なる心がなかつたならば、恐らくは逆境に處して忽ち畏縮落膽し、危難困厄に遇ふて俄かに顏色を失ひ、逡巡趦趄して半途に事を擲つであらう、併しながらよく穎敏の才に乏しくとも、其の心志剛邁であつて克己堅忍なるなくば、敢て失望落膽の歎なく、艱難に逢へば逢ふ丈けます〳〵其の全力を傾注して、

其の目的を成就せねば止まぬのである、然れば天下の如何なる難事が、能く剛邁克己堅忍持久の精神を傷け得るものがあらうか、即ち一たび勇猛克己の精神を奮つて公道に據り進んだならば、志す所一としてならざるはないのである。

成功の鍵は即是也

事業の成功は一に鍛錬に之を待たねばならぬのである、即ち半途にして業を廢し、或は其の志を二三にし、朝に此に移り、夕に彼に趨り、難を避け、逸を求め、敢て錬磨の功を積まなかつたならば、遂に何事をも成す能はずして止み、路傍の塵芥と等し

く人の之を顧みるものなく、寧ろ社會の廢物として、萬人の指彈を受くるのであらう。

要するに鍛鍛には堅忍不拔の勇猛心を要し、殊死奮鬪の努力を注がねばならぬのである、心膽智能の鍛冶、學藝事物の錬磨一一として是れ彼の遊惰安逸に依つて成功すべきものはなく、艱苦を經てこそ安樂あり、霜雪を經てこそ松柏の凋むに後れたるを知るのである、フラツト曰く、成功は尙ほ金庫の如し、之を開くには必ず無かるべからざる唯一の鍵ありと、

其の鍵とは何ぞ、之を消極的に云ふときは、即ち辛抱である

之を積極的に云ふときは、即ち鍛錬である、困難辛苦の中を脱却して更に一段の高所に攀ぢ登り、又一段の光明を認めんには鍛錬と堅忍に據るの外はなく大なる成功は幾多の鍛錬を經たる堅忍の鍵は以て開かるゝものであるから、鍛錬は又成功の鍵なりと云ふことが出來るのである、卽ち心身を鍛錬し滿身是れ膽其の心鐵石ならば何の成功か期し得られざることやあらうか、

徳川家康の遺訓に、

人の一生は重荷を負ふて道を行くが如し、急ぐべからず、不自由を常と思へば不足なく、心に望みの發らば困窮したる時を

思ひ出すべし、堪忍は無事長久の基、怒りは敵とおもへ、勝つことばかりを知りて、負る事を知らざれば、害其身に至る

己を責めて人を責むるな、及ばざるは過ぎたるよりも勝れり

此の遺訓以て坐右に銘すべきである、論語には『過ぎたるは尙及ばざるが如し』とあるが過言過食過飲など其他分を過し度を過すの害は、其の分に足らず其度に足らざるの害より甚しきものがあるから、流石に家康だけの大人物『及ばざるは過ぎたるより勝れりとの名言ある所以である、又たジョン、ステルリング曰、

自ら私慾に克ち、淡薄を以て己を奉ずるを敎ふる說は、假令其の說極劣なりとするも、之を敎へざる他の最善の說よりも勝れり、

と皆是れ鍛錬修養を敎へたものであつて、又た西人の詩に、『各人自ら己を改め化せんことに着意せば、又一國を改め化すること容易なるべし』と言ふことがある、更にソクラチスの言に『天下を動かさんと欲するものは、先づ自ら動くべし』と言ふことがあつて、一人の鍛錬修養は、克く一國を稗益する所あるは云ふ迄もない事である、唯だ此塲合成功に伴ふて最も誠し

むべきは油斷大敵である。

油斷は何故に大切であるかと言へば、多くは失敗は油斷より招くからである、苟も大成を前途に期するものは、其の學を究むると、其業を努むるとに論なく、常に全心を込め全力を注ぎて、寸分の油斷なく、惡魔の乘すべき間隙なからしめんことが肝甚であつて、レエキスピヤーは、

最大安全は恐懼の心にあり、

と言つて居るが、若し夫れ一學漸く其の端を聞き、一僅かに其の緒に就くや、早くも其の意の滿ちて慢心を生じ、其の心驕つて先進を蔑にせんとするが如きは、到底其前途に光明を認むることが出來ぬのである。

立身成功の秘訣は、志を堅ふするにあり、

とはチスレリーの言であつて、尙ロングフエローは曰く、

沈愼にして點せる者は强く、忍耐にして摧けざるものは神聖なり、

と云つて居る、是れ皆鍛錬修養の必要を說いたものであるが爰に油斷大敵に伴ひて、最も誡しむべきは、小事を愼しむことである、小事なりと云つて油斷すれば、即ち大事を破るの例は

古今の人物傳に多く見る所である。

汝宜しく殘れる所の碎屑を集むべし、一も之を亡失せしむること勿れ、

と基督が訓誡して居るのであるが、卽ち塵も積れば山を成すの喩の如く、小事を愼しまなかつたなれば大事を成すことが出來ぬものであつて、其の大事を成すには、固より努力を要するは言を俟たぬ處である。

努力せよ職業は神聖也

人に依りては其職業を賤しむものがある、或は自己の

職業を耻づるものがある、勿論不倫不義不正邪曲に亘る職業の如きは、大に耻づべく大に改めねばならぬのであるが、此等の敗德不正の職業は決して人道上の職業でなく、又人としての業務ではないのであるから、是等は總て度外に置くべきものであつて、苟も正道に據れる職業は悉く皆是れ神聖でないものはないのである、何となれば職業其ものは人をして貴からしめ、或は又賤しからしむるものでないのであつて、人を貴からしめ人を賤しからしむるものは、實に其人其人にあるのである、人其人の心にあるのである、故に職業其物より見れば其の體力を

勞するの職業と、其の心思を勞するの職業たるを問はず、苟しくも一身一家の爲めに精勵努力するなどは、洵に尊ぶべく敬すべく、社會公共の爲めに國利民福の爲めに、重んずべく奬むべきものである。

されば眞に志を立てゝ業を勵む者、其職業の如何を問はず之れに從ふを辭すべきものでないのであつて、若し之を辭するが如き徒は、眞に其志を立てたるものでないのである、昔は支那の趙岐、餅を北海に賣り、沈麟士は簾を織りて書を讀んだのであるが、今の書を讀むるの士は、或は其職業の下賤なるを

耻ぢ、僅かに中等程度の學校を卒業すれば、最早父兄の業を繼ぐを欲せず、書簡文さへ滿足に綴れざるに、慢心頻りに萠して濫りに職業の貴賤を口にする者あるが如きは、洵に唾棄すべき陋心事と云はねばならぬのである。

◈ 失敗は是成功の基

失敗の原因

成功の基は失敗にありとは、古人の句であつて、吾人何ぞ失敗を基として成功せざるべからざるの理があらうか、所謂順風に帆を擧げたるが如し、

些少の危險蹉跌なくして、成功の彼岸に達することは、何人も之れを望む處であるが、併しながら如斯幸福は到底望むことが出來ぬのであつて、一度成功の勝利者となつて、歡聲天地を動さんと欲するならば、吾人は幾度か失敗と蹉跌を踏まねばならぬのである、果して然らば成功の樂園に其身を置かんとするならば、之れが普通の徑路となつて居る、失敗の性質並に之に應ずるの覺悟がなければならぬのである。

凡そ何事にもあれ其失敗を來す所以のものは、必ず其所に何等かの原因がなくてはならぬ、智者がよく成功する所以のもの

は、良く其原因の那邊に存するかを追及して、再び其の轍を踏まぬから良く成功するのである、されば爰に失敗の原因を擧げて、社會萬般の事業に通有なる事項を釋明することは極めて必要のことであるが、社會萬般の現象に對して、完全なる通有的原因を列記すると云ふことは、到底不可能のことに屬するのである、故に吾人は凡百の事情に應じ、是れに處するの專門的智識と一般の常識とを應用して、其判斷を誤まらんことを要するのであるが、爰には其最も重大にして且通有なるものに對して二三の說明を試みんと欲するのである。

智識收得の冷淡

吾人が爰に或る事を爲さんと欲するに當つては、最も先きに心裡に描出せらるゝ處のものは、即ち一定の目的である、目的を立つることは何人も容易に且つ自由に之れを定むることが出來るのである、然れども若し此目的を達せんと欲するならば、これに關して必要なる智識は、一切の手段方法を盡して聚取せねばならぬのであつて、世の成功者と呼ばるゝ者が、如何に成功せる事業に對して、其智識を有するかを觀察したならば、客易に這般の事情は是れを窺ふことが出來るのである、今假りに一例を

擧げて見るならば、學生が或る試驗に應ぜんと欲するの時、其學生にして試驗に應ずるの充分なる智識を有して居たならば、何ぞ受驗術を學ぶの必要があらうか、何ぞ好運を希ふ事の必要があらうか、是等の受驗術を學び、幸運を希ふは即ち之れ智識なきが爲めに、他の方法によつて之を補はんと欲するに外はないのである、若し吾人の智識が全能神の如くであつたならば、何事をするに付ても成功は必ず疑ひないところであらう、然るに吾人が常に幾多の失敗を重ねて、漸く成功の域に達すると云ふことは、失敗の經驗に因つて、目的に對する智識を收得した

るが爲めである、初めから之れあつたならば、殆んど失敗なる語はないのである、苟も世に成功の勝利者たらんと欲するものは、自己の目的にする事項に向つて、完全なる智識を聚取せねばならぬのである。

若し如斯するに於ては自己の智識の到底及ばない處の、法外なる希望を起すものも少し、又從つて事業に失敗し世を悲觀するものも少いのである、是れ吾人が目的を遂行せんと欲するならば、先づ其手段方法を研究せねばならぬと云ふ所以である所謂世の輕薄者流は兎角智識の收得に冷淡であつて、何等の思

慮なく計畫なくして事に當るが故に、思はざるの失態を演じて其收拾することが出來ぬ事となるのである、良將は良く戰ふ前に當つて敵の兵力と自己の兵力とを比較し、其他戰爭の勝敗に影響すべき諸般の境遇を知るのである、若し夫れ世の成功者として勝利者たらんと欲するならば是れに應ずる智識を完備せねばならぬのである。

完全なる準備

凡そ事物を一定の時間内に成功せんと欲するならば、之れに要する諸般の準備の大切である事は、何人もよく之れを知る處であるが、扨て何人

も之れが完全であるか否やに至つては、頗る疑はしきものである、殊に我國民は何事にも成功なる結果を急ぐの傾向があるのであつて、所謂準備をさ〳〵怠らないと云ふに至つては、遺憾ながら多くの欠點があると思ふのである。

凡て事は成るの日に成るにあらずして、如何なる些細のことにても、是れに伴ふ處の準備がなかつたならば爲し難いのである、但し一言に準備と云つても其間自ら緩急輕重の區別があるのであつて、これを取捨撰擇するは明晰なる頭腦の判斷に待たねばならぬのである。

凡百の準備を一切整頓せんとするは財政上果た又時の上からして是れを許さぬ場合がある、殊に財政の上に於ては然るのである、故に目的に對する準備の必要は、準備其のものよりも之れが取捨選擇が却つて大切と云はねばならぬ、若し之れを誤るに於ては比較的必要でない處の準備に對して、多大なる時間を要し勞力を要し、又金錢を費してしかも其功果極めて輕くして、往々失敗に終ることがないとも限らぬのである。

勝敗は最後の五分間

冷淡は萬事をして失敗に終らしむ、否失敗に終ると謂はん

よりは、寧ろ初めより之を爲すの心がないのである、世人往々事を初めるに當つて、初めは極めて熱心に、殆んど晝夜兼行寢食を忘るゝの觀があるのであつて、吾人は其の熱度の重きに驚かざるを得ないのであるが、併し數ヶ月甚しきは數日を經過するの後に於ては、漸く怠慢と冷淡とを催し、自ら事に當らずして人をして事に當らしめ、遂に最後の目的を中途にして挫折せしむるに至るのであるが、如斯の徒は世間其の數の枚擧するに遑がないのである、是れ事業の失敗中最も著大なものであつて、何が故に然るのであらうか。

人類は古きを捨て新らしきを好むの習慣があるのである、殊に此傾向は吾人日本民族の特質となつて居る、火山國の人民は熱し易く冷め易し、之れを英國人民に比較して見ると、全く正反對となつて居るのであつて、彼は保守的の國民である、從つて一度着手した事業は、飽く迄も之れを成功せしめざれば止まざるの概がある、ワットの蒸汽機關の發明に於けるは其好適例である、されば成功の秘訣は執着にありと云ふも決して過言でないのである、明將ナポレオンは戰爭の勝敗は實に最後の五分間にありと云つて居る、之れ最終の瞬時こそ最も華々しく勉勵

努力すべき事を敎へたものに外ならぬのである。

適當なる機會を捕捉

目的に對して充分なる智識と熱心とがあつても、適當なる機會を捉ふることを得ざるに於ては、決して成功するものでないのである、されば古人も成功の如何は適當なる機會の捕捉にありと迄極論して居るのである、然らば如何なる時が適當の機會であるか、是れを知るにあらざれば卽ち捕捉することが出來ぬのであつて、元より種々の社會現象に對しては、何れか其良機會なきや否やは之を具体的に摘示せんことは難いのであるが

良機會に關する抽象的の觀念を概言するなれば、或る一定の時期を過したならば、到底成功するの道なき時間、又は一定の時期を過せば、多大の損失失敗を來すべき時間を云ふのである。

されば機會なるものは時間の問題である、多くは瞬間的の性質を有するのである、言を換へたなれば非永續的のものであるから之を捉ふる事極めて難く、世上不側の失敗に陷るものあるは、かゝる瞬間性を有する機會を逸したるに基くのである然らば之れを捕捉せんとするには、如何なる態度を取るべきであらうか、之れが研究を必要とするのである。

凡そ機會を捕捉せんと欲するならば、常に細心の注意を拂つて、世態人情の如何を觀察して居らねばならぬ、良機會の來るや決して之れが豫告をするものでないのである、從つて不注意は其良機會を喪失せしめ、之れが通過して後に悔ゆる事が甚だ多いものである故に監視の眼光烱々たらんか之れを捕捉するは敢て難事でないのであつて、而して一度好機會を捕捉し多大なる成功と利益とを得たる時は、更に第二の機會の來ること今や遲しと待つに至るのである。

如斯くにして第三第四と來るべき良機會を逸する所なく捕へて、之れに對する所置方法を誤らなかつたならば、比較的少き勞力と資本とを以て、多大なる成功を得ることが出來るのである。

惟ふに複雜なる人世は、常に吾人に向つて好機會を與へつゝあるのである、鋭敏なる頭腦と正確なる判斷とによつてよく吟味したならば、之れを利用するの塲合極めて多いのであるが、性來魯鈍にして之れを利用するの道を知らざる處のもの、常に他人の爲に、機先を制せられて、己れは他人の跡を追ひ而も失敗の悲慘を味はねばならぬのである、されば吾人は機會捕捉の

前提として、鋭敏なる觀察力と熱心なる注意力を、養成せねばならぬのであつて、若し之れを缺くに於ては、常に失敗者の伍班を脱することが出來ぬのである。

失敗者の犧牲

青雲の志を抱いて日夜奮戰努力しつゝありと雖も、一朝不時の病痾に襲はれて心身漸く不完全とならんか、如何に成功を希ふも到底之れを出現し得べき道はないのであつて、世上非凡なる天才が往々にして夭折し、不治の病に冒され一生を悲慘の中に送るを見るは誠に嘆ずべき事である、是れ失敗の原因なりと云つても、又如何

ともすることが出來ぬのであるが、是れに反して商工業等に於ては、經濟上の變化、市場の狀態、人氣の如何等に對して相當の注意を拂ふ時は、その變化に伴ふ多大の失敗は之れを防壓することが出來るのである、然れども目的に干して境遇の變化すいことは、往々豫想することが困難であつて、世上幾多の失敗者はこれが爲めに犧牲となるものである。

注意すべきは失敗にあらず

吾人が絶叫して止まざるは即ち失敗に伴ふ處の失望を恢復するの勇氣と、而して失敗後に於ける善後策

である、若し之れなくんば到底社會に立つことは出來ぬのである、七轉八起の勇は[illegible]ち成功の基である。

博士スマイル氏は人間の注意すべきは失敗其者にあらずして失敗後に於ける善後策にありと云つて居るが、其言や誠に穿ち得たりと謂ふべきものである、何となれば何人にもある心理的の作用として、失敗の後には理性の判斷が正くなくして、往々亂暴放縱に流るゝの嫌があるからである、故に此の常軌を逸せんとするの心を制して、理性の命に從はしむるは處世の要件として一日も輕忽に付することが出來ぬのである、古今の歷史を

を見るも性急にして短慮なるもの、往々些細なる失敗より甚だしき失敗を重ねたるは、畢竟失敗の後に於ける態度を誤つたもの外ならぬのである。

然らば吾人は失敗の後には如何なる決心と態度とを必要とすべきか、愼思熟慮先づ其原因を探究し、決して之を再びせざる事と之れに代るべき最良方法とを案出するにある、若し夫れ失敗後に於て其原因を深く探査することなく、漫然再び目的に向つて突進せんか、再び前車の轍を踏み何等成功する所がないのである、如斯再三再四失敗するに至つたならば、勢ひ亂暴狠

籍となるか、然らざれば大に心神萎縮せしむるに至るのである

長袖者流の駄洒落耳

又世には失敗すれば自ら慰めんとして、酒を飲み女に戯れ遊樂に流るゝを見るのであるが、吾人は其の何の意なるかを解するに苦しむものである、古人は酒は百樂の長と云つて居る、然れども近世醫學の證明する處は、全然之れに反するものであつて、心身を害するは勿論のこと甚しきに至つては財を破り品性を墮落せしめ、遂に收拾することが出來ぬやうに至るのである、之たを例へたならば火事を鎮めんとするに當つて、ポンプ

を以て石油を注ぐに異なる處がないのである、火勢益々強からしめ、損害益々大ならしむるのみである、如斯一見明白の理を辨ずることなく、失敗に際し酒を飲み元氣を養ふなどと辯護するの徒は、吾人の其理を會得するに苦むのである、更に遊女より、或は卑等なる遊藝に依つて、失敗を慰安せんとするが如きは、決して他日の成功を欲するもの、取るべき手段方法でないのである。

惟ふに失敗して其慰安を求めんとするが如きことは、其の如何なる手段方法によるも、現代奮鬪的青年の爲すべき所でない

のであつて、是れ畢竟長袖者流の駄洒落に過ぎないのである。

七轉八起の勇

惟ふに一面世が文明に進むに從つて、生存競爭は次第に激甚となり、從つて失敗者の數も日一日と增加して、其中には餘所の見る目も氣の毒なものもある、然れども彼等とても尙ほよく自己の失敗の原因、及び之に對する所置方法を誤ることがなかつたならば、其人としての能力相應に成功の地位に達し得べきは當然の理である、如斯にして猶未だ衣食の道を得るに至らない樣の事があつたならば、世人は恐らく彼等を見捨てるやうの事はないのである

故に吾人は不幸再三再四の失敗することあるも、決して亂暴狼籍に流るゝ事なく、且つ不平怨恨の徒と變ずることなく、誠心誠意所謂七たび轉んで八たび起つの勇氣と、失敗の經驗より得たるの智識とを以て、飽く迄も奮鬪するの覺悟がなくてはならぬのである。

◆人生慰安の本源

何をか人生の歸趣とすべき？

萬籟寂として聲なく、靜謐の大氣は

天地を覆ふの眞夜、遠く蒼穹を仰いで星斗闌干たるを見るもの誰か宇宙の雄大なると、其啓示の深遠なるとに想倒せざるものやあらん、惟ふに哲學は宇宙の森羅萬象に向つて、智識的解釋を試みんと欲する學問である、神の存否其者より先つ研究を初め、宇宙の森羅萬象に向つて、基本的智識を求むるこそ、即ち哲學の本義である、實に哲學は學問の基礎にして、智識の源泉である、彼の先哲アクストートルは、宇宙は神によりて創れたる一封の手紙也、こたを解釋し是を說明するは哲學の本務なりと云つて居るが、彼の言の如く神の創造せる宇宙を解釋するを

以て哲學の本旨と爲すは、是れ少しく狹きに失するの觀なき能はざるのである。

哲學的研究は宇宙の森羅萬象悉く皆之れを理論的に說明することが出來るのであらうか、曰く然らず限り有る吾人人力を以て、限りなき空間と時間とを如何でか確的に說明することが出來得べきや。

爰に於て吾人には其信仰を生じ、宗敎を生じ、哲學は智識の要求である、宗敎は感情の流露である、哲學は理性の產物である、宗敎は情愛の結果である。

古往今來幾多の哲學者出て、宇宙の本元神の存否に付き、之れが智識的解釋を試みたのであるが、然し未だ完全なる解釋を之に與へたるを見ないのである、されば人心自ら不安に傾き其勢に乘じて宗教生れ、感情に訴へ、神を想像し、運命を說き、安心立命を敎ふるのである。

吾人は萬物の靈長たる理性を有する人類として、此世に生を享くるのであるが人生の意義、宇宙の本体、神の存否を知らずして、果して滿足することが出來るのであらうか、徒に感情にのみ走り、徒に物質的滿足のみにより、所謂人糞の製造機械を

以て終るべきか、言を換へて云ふときは、吾人が生存の根本的觀念に於て、哲學を以て不安を滿すべきか、宗敎を以て不安を充すべきか、將又物質的欲望を以て不足す滿をべきか、前者によれば精神的慰安主義となるのである、第三によれば物質的慾望追求主義となる、吾人は此の三個の大問題に付て、果して其何れを以て、人生の歸趣とすべきであらうか。

徒に成功！成功！と苦心焦慮すると云へども、此根本問題に觸るゝ處がなかつたならば、人類としての價値何處にかある？三者其何れを撰ぶべきかは、實に吾人の第一に考慮せねばなら

ぬ根本問題であつて、之れを決せざれば人類が人類としての價値は、甚だ哀れなるものと云はねばならぬのである、又三者何れを撰ぶべきかにより、人は理論家となり、感情家となり物質主義者となるのである、現代青年の取るべき人生慰安の本源果して如何。

現代は物質主義の權化？

人生慰安の本源を定むるは、是れ實に千古の大問題である、或る時は哲學主義に傾き、或る時は又宗教主義に傾き、或は時は又其物質主義となる、之れを今史蹟に徵するに、

埃及・希臘の古代にありては、哲學主義に傾きつゝあたのであるが、キリスト出現以來の歐洲諸國、釋迦誕生以來の東洋諸國は總て皆宗教本義に傾いたのである、十九世の初めより各種の科學進歩發達し、機械工業の隆盛となるや、世界は皆是物質主義と化し了り、今や世は滔々として物質主義の權化たらんと欲するのである、從て現代青年一般の思想は、非哲學、非宗教的に流れつゝあつて、宇宙の神秘、人事の複雜なる現象に向つて其の原理原則を追求することなく、只日常の衣食住に孜々汲々たらんと欲し、遂ひ崇高偉大の人格者を度外視するに至つて、

社會は徒らに物質的慾望の競爭場裡と化し了り、外形華美なるの生活を夢み、思想界の模索を憂ふる所なく、物質の奴隷となり、本能の滿足となり、人糞の製造機械となり、趣味は次第に劣等に傾きつゝあつて、彼の禽獸を去ること甚だ遠からざるに至つたのである、如斯くにして今や世は擧て輕佻浮薄となり、人格の士なく、主義の人なく、世道人心日々に萎靡衰頽して、遂に思想界は寂滅に終らんとして居るのである。

是の時に當り、此の際に處して、吾人が彼の哲學主義によるべきや、宗教主義によるべきか將又物質主義によりて之れを持

續すべきかを論評するは、只に評論としての興味あるのみでなくして、實に刻下の大問題にして青年の急務と云ばねばならぬのである、即ち其三者何れが最もよく人生を慰安するに適すべきかを研究するは、只に成功失敗の餘沫を說くに比して、其痛快なること將又社會に多大なる效果あること、爰に言ふを俟たざる處である。

不斷の努力

吾人人類の人類たるの價値は、高尙なる精神的の思想生活を爲すの點に於て、他の動物と區別せらるゝ處である、他の動物とは高尙なる思想生活の味を

知らずして、只其本能の滿足を以て是れ事とするのみである、本能の滿足は物慾の滿足を意味するのであつて、食慾、睡眠慾生慾、凡てこれ物質主義によつて滿さるべき本能的慾望である故に徒らに物質主義を唱ふるものは人類を騙りて動物たらしむるものである、人糞の製造機械たらしめんとするものであつて吾人は到底之れを以て吾人を慰むべき最後の手段方法とする能はざるのである、即ち宗教的慰安、哲學的慰安を得せしむる一個の手段方法たるに過ぎずして、最終の理想となすに足らぬのである。

然らば吾人は宗教によりて慰安を求むべきや、將又哲學によりて其慰安を求むべきや、人類の進化發展を希望するの點よりして、所詮哲學に待たねばならぬことを信ずるものである。

夫れ哲學は前述したるが如く、森羅萬象に對して眞理を發見し、これによつて滿足せんと欲するものであつて、常に不斷の努力が伴ふものである、この努力によつて滿足せんと欲するものであつて、其の根本に於て慰安を求めんと欲する中にも、自ら進取の氣性が充滿するのである、されば哲學の研究は即ち不斷の努力を意味し、終なき文明の進歩を意味するものである

彼の宗教家の謂ふが如く、限りある智識を以て、限りなき宇宙人生を解決せんと欲するは、畢竟徒勞に過ぎざるものであるが故に、一切の哲學は其の價値なしと斷定し、只惟れ神の命、神の支配に一任せんとするが如きは、人類の活動を停止せしめ、其向上を阻害して、文明の遊歩を呪ふものである、宗教家の主義は即ち博愛である。平和を根本として人道を解くものであるが、宇宙の本質、神の根本的存否如何に向つては、其研究を試みざるものである、故に彼れには努力なく、氣慨なく、向上なく、又其意氣もないのである、殊に彼等が限りなきの宇宙を、

限りある人力を以て解釋せんと欲するは不能なりと云ふも、是れ一應の眞理と云ふを得べしと雖も、絶對の眞理とは云ふことが出來ぬのである。

世の支配を擧つて宗教家にのみ一任せんか、曷ぞ良く無窮の進歩を望むことが出來るであらう？博愛主義可なり、人道主義可なり、平和主義又可なりと云へども、然れども吾人の宗教的慰安主義に與せざる所は、彼等の宇宙人生に對して、神を想像し只其の命に從ふのみを以て是れ足れりとなすを悲しむものである、蓋し其の根本に於て不斷の疑問を挾み、奮鬪努力神の存

在、宇宙の本体を解釋し、是れに伴ふて生る、慰安を求めんと欲するの勇氣がないのである。

人生最高の理想

惟ふに不斷の努力は即ち人類の本性である、人間の人間なる所以のものは、努力の結果に伴ふ慰安によつて、更に努力すべきものある人世終に不可解を絶叫し、宇宙の本質又不可解、哲學によつては吾人を慰むる道なしと悲觀し、遂に女々しくも其感情に與へ一切の努力を賭し以て安心立命を得んとするが如き、彼の宗教に歩まんとするが如きは、抗爭の勇なきものと言はねばならぬ

のである。

故に吾人は此の點に於て成功の根本、處世の眞意義は之れを宗教に取らずして、現代に於ては比較的不完全にして、且安心立命の手段としては充分でないのではあるが、將來其の缺點を補ふて完全ならしめ、其の結果慰安を求めんと欲する哲學主義を以て、人性最高の理想と信ずるのである。

且それ現代の文明は智的産物である、現代思潮は將に其歩を轉ぜんと欲すれば、其の當然の經路として哲學主義に赴くべき傾向を有するのであつて、決して彼の宗教主義によるべきの傾

向はないのである、何となれば現代青年は宗教に赴かんには、餘りに智識的である、餘りに研究的である、されば物質文明の弊を救ひ、吾人人類の本性を發揮せんと欲するものは、哲學主義によるを第一要義とするのである、然し吾人は唯に現代物質慾望主義の惡流に投じて、黄金萬能、本能滿足を主張して、現代文明として更に甚しく腐敗せしめんと欲するものでないのである。

◈ 青年は須く斯くして世に處せよ

凡て己れの職業に趣味を有て

前遞信管理局長　棟居氏は曾て吾人青年を訓へて曰く人々がその執る處の職業に趣味を有つて、眞直に往くことは極めて大切な事であつて、ソクラテスは『人の仕事に賤しきものなし、唯怠け者のみ賤し』と言ひ又スマイルは『人は各々皆一個人として己に對し又た周圍の人々に對して盡すべき職分を負はざる者なし、此等の職分なくば一生の價

値なし』と說いてゐるのである、然るに我日本人は兎角仕事を嫌ふと共に、之を卑視するの傾向があるやうで、ともすれば他人の職業を羨む癖があるは、餘程青年の猛省せねばならぬ事と思ふ、私の作つた日々の心得と云ふものを順次左に掲げて參考に供したいと思ふ。

即ち其一は『熱心に精を出して眞面目に仕事を爲すこと』であつて、仕事とは職分として天から授けられたる吾々の仕事を意味するのであつて、固より惡い意味の仕事でないことは云ふまでもない、即ちその善い仕事を天職として熱心に一生懸命に

眞面目でやるので、決してよい加減にやらぬことである、今日一般の風潮は未だ仕事を宜い加減に遣るの傾向がある、此の點に至つては歐米人の方が餘程眞面目で、而かも熱心であるやうに思はれる。

彼の國では役所たると工場たるとを問はずして、使用人が執務にかゝると、その一定の時間中は頗る熱心に勤めて少しも怠らぬ、我日本人のやうに執務中呑氣に煙草などを吹かしてゐるやうなものはない、嘗て故井上侯が九州のある炭坑から外國人を雇入に賴まれて外國人を伴れて行つた、處がこの外國人が工

夫の勞働狀態を見ると、其監督者がついてゐると仕事をするが附いてゐないと働がないと云ふ風があつた、するとこの外國人は嘆息して『私は折角參りましたものゝ、監督者がゐなければ仕事をせぬやうな工場には、傭はるゝことは御免を蒙りたい、私共は處々を歩いて種々の工場を見ましたが、監督者がゐなければ仕事をせぬやうな工場は、未だ嘗て見たことがありませぬ』と云つて、折角の囑託を斷つたい云ふことである。

要するに監督者がゐなければ仕事が出來ぬと云ふのは、實に意氣地がないことであつて、自分に與へられた仕事は決して他

人を煩はさない、己の一分を完全に仕上ぐると云ふので無くてはならぬ、熱心に眞面目に仕事をするならば、監督などの要ることはない筈である、監督などは國家の眼から實に不經濟なものであるから、吾々は監督者を要せず何處までも、他人の世話にならずして、十分に働きたいものである、左傳に『勤むれば則ち匱しからず』と說いてあるが、勤めてさへ居れば貧乏にはならず』漸次に幸福に向つて來るのである、勤めてゐないから隙間が出來て、その隙間から惡魔がつけ入るのである、擊劍をすると同じことであつて、油斷をして居ると直くに突き込まれ

るから、用心をして隙がないと却々に打ち込まれないと同じ理である、昔の俳句に『ぐる〳〵と凍るひまなし水車』と云ふ或は『長命はたゞ働くに如はなし、流るゝ水の腐らぬのを見よ』と云へる歌の如き、何れも人間は働いてさへ居れば、惡魔の入る餘地がなく無事平穩に生活が出來て貴重なる生命を長く保つて行かれる意味であるから、熱心に精出して眞面目に仕事をするのが一番必要であると思ふ。

明日を賴むな今直ぐ爲せ　何事を爲すに就ても明日あるを賴むべからず

今日爲すべき仕事は必ず今日之を爲す事であつて、之れに就て思ひ當るのは日外私の處に人を傭つた節に、その親方なる者が手當を澤山出して呉れては困ると云ふから、その理由を訊いて見ると餘りに手當を澤山に貰ふと、働かなくして一日で出來る仕事は、二日も三日も延してやるからだと云ふことである、斯ふ云ふ考では實に困つたものであつて一日に出來る仕事を煙草や馬鹿話に過して翌日に繰延べるとは、實に不經濟極まることであつて、吾々は日々の仕事は何時も几帳面に仕上げて仕舞ひ假へ朝に働き夕に死しても差閊のないやうにする事が肝要であ

る。

室鳩巣は『一日生きては一日の道を盡して死し、一月生きては一月の道を盡して死し、一年生きては一年の道を盡して死す斯くて假令朝に道を聞き其夕に死すとも糸毫の遺憾なし』と云つて居るが、吾々は實に朝に道を聞きて夕に死すとも可矣と云ふ確信を以て寸陰を無駄に過さぬやうにしたいと思ふ。

之は即時即刻に實行の出來ることである、戊申の詔書の中にも『忠實業に服し』と仰せられてあるから、その日〳〵に命せられたことは倦厭の情を判して、何處迄も眞面目に勵んで大御

心に答へ奉らなければならぬのであつて、彼の二宮尊德の歌に『この秋は雨か嵐か知らねども、今日の務めの草を取るかな』と云ふのがあるが、實に是れ味ふべき歌であつて、この歌の如く毎日の仕事は日々片付て行くことが肝要である。

時は金なり

能く規則に從ひ時間で約束は堅く之を守り金錢物品の支拂返却等を期限を違へぬことを心掛けねばならぬのであつて、要するに規則はキマリ筋道である即ち自然と人間に備つて、自然の制裁として理法に適へた規則法則と云ふものが、人間社會に備つてゐるものである。

教育勅語の中にも『常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ』とあつて、國家の憲法や法律を能く守れと云ふお言葉である、此規則や筋道に從ぬと亂脈になるものであるから、是非とも遵守せねばならぬのである。

次に時間と約束を堅守することに就て一例を擧げて見るなら、一体仕事をする日傭人等は、一定の時間に一定の約束の仕事をして、一定の賃錢を取るのであるが、兎角この時間と約束とを守る觀念が甚だ薄いのは、最も矯正せねばならぬのである又金錢物品を返却支拂に期日を違へぬやうにすることは極めて

必要である、卽ち催促がなくとも規限が來れば自然と返すのが當然である、約束を違へるやうでは迚も信用を得られるものでなく、また信義を守らない人ほど賴母しからぬものはないのである。

又た時間の如きも決して無駄に費してはならぬ、時間は眞に金錢であつて、無駄に時間を一秒々々と刻み送るのは、取りも直さず金錢を刻み減ずと同一であるから、分秒たりとも時間を粗末にせぬ覺悟が大切である。

貯蓄思想の養成

『不如意不自由を常と思ひ、質素倹約を主とし己に克ち慾を制し、貯蓄に心懸くること』を必要とするのであつて、この不自由を常と思ひと云ふのは徳川家康公の言葉で、人間と云ふものは何でも自由に行くべきものでない、若し自由に行つて得意滿々の時があつたら、その時が一番危ない時である、盈つれば虧くとは此事である、家康公が不足のない境遇にありながら、不自由を常と思へと云つてゐる、さういう考へでゐると奢侈の心は起らないのである。

處が隣の人のよい着物を見て自分で慾しがあると云ふ樣に、人眞似をしてゐると却々身代が持てぬ、衣食住はなる丈け質素にして贅澤を避け、無駄をせずして廢用利用に心懸けねばならぬのである、斯くして己に克ち慾を制することが大切である、己即ち我と云ふ心の思を抑へると人間は自然と氣も樂になり善い考が起るが、油斷をしてゐると横から己と云ふ思が出て來るから、この己に克つと云ふことが最も必要であると思ふ。

人は五官の慾と云つて種々の慾が起るものであるが、自分の生存に必要なるだけに止めて、我以上の道徳宗教の力に依つて

之を抑へつけねばならぬ、スマイルス氏が眞正の人格品性は、劣等なる慾情に打克ちて高尚なる要求に從ふの自制力より發するものなりと說いたが、全く己に克ち慾を制することである、勿論慾を制すると云つても無暗にするのではない、要は相當の程度に於てその人格を保つことは當然である、例へば工場に行く人ならば、劇しい勞働をするのであるから、それに堪へ得る程度に相當の滋養物をとる事は勿論必要である。

併しそれ以上酒を飲み、種々無駄の金を費ふことは甚だ宜しくない、そんな金があるならば貯蓄するが大切である、私の云

ふ貯蓄は獨り金錢だけの貯蓄を目的とするのみでなく、その外に精力、學問、思想と云ふものも亦貯蓄せねばならぬ、精力の貯蓄とは所謂妄想に耽つて精力を無駄に費さず、又た徒らに酒煙草の如き身体の營養を害するものを好むは精力貯蓄上の一大禁物である、私も從前は酒も煙草もやつてゐたが、將來激烈なる生存競爭に打克には、實力の養成と長命とに必要がある、然るに酒煙草の如き有害無益と證明されてゐるものを廢するの意氣地なく、可惜精力を消費してゐるやうでは、將來の日本國民として耻かしい次第であると考へて、斷然之を廢めて了つた、

廢止以來一層身体が丈夫となつたのである。

尙學問の貯蓄、思想の貯蓄、之も實力競爭に當つて必要であつて、之れなければ漸次競爭に負けて斃れて仕舞ふの外はないのである、斯く精力、學問、思想を十分に蓄へて、何時も實力を養成して置かなければ必ず失敗する、今日の生存競爭は實に角力の如く、全く實力競爭の世の中である、その上金錢の貯蓄をすることが肝要である。

彼の太く短き主義や、宵越の金を使はぬと云ふは大なる間違である、今我國と外國との貯蓄額を比較して見ると、我國は實

に白耳義、和蘭、英國に比してその二十六萬の一乃至七分の一に當ると云ふ、實に淺間しい姿である。

日々の交際には眞心と禮儀

日々の交際には眞心を表すを第一とし、義理を缺かず禮儀を失はず、又人の迷惑に成らぬ樣氣をつけることであつて吾々人間は恰も周圍の圓い形の圈を畫いた中にゐると同じで、一番近い圈の中には父母兄弟、少し遠い圈の中には親戚朋友、其次には一般の同胞と云ふものがある、所謂社會的動物たる人間は孤立では決して可けぬのである。

即ち互に扶助し相擁して行かねばならぬ、その交際は眞心を表はし親切を盡すことが必要である、然らざればその間が圓滿に行かない、さうして義理を欠かさぬ樣にすれば自然に親密になる、即ち先輩の好意に對しては當方も相當の事をする、先方がどうかして呉れても、あれは當然だと云ふ風にするのは義理を欠くことであつてずるい遺方と云はねばならぬ。

禮儀に就いては古の賢人が、禮はよく自他親和し人を觸れ犯すことなし敬して愛し恐を懷き、才を言はず德をかくし智あれども愚を輕せず、和すれども亂れず親愛なれども慢事なく、過

ぐれども及ばざる如く、高けれども卑きを知り盈れども虛しきが如く、凡そ容貌威儀より言語應接の間に至るまで、たゞ謙德の心を忘れず、其用は私を貴ぶに在り』と言つたのは能く禮儀のことを言い表はしたのである、されば人は禮儀を失はぬと共に人の迷惑にならぬやうに氣を付けて、孔子の己れの欲せざる所は之を人に施すこと勿れと說き、ヨハネの汝が人に爲さんと思ふ所のものは、その如く之を人に爲せと說きし如く、自分が人からせられし氣持の惡いことは、人も矢張り嫌なのに違ひないから、さう云ふ事は人にしないやうにする、人からせられ

て氣持のよい事は、人も矢張り好くに違ひないから、さう云ふ事は人に施すと云ふ風にすれば、その間が自然に圓滿に行くのである。

又『人には親切を盡し、人の不幸を思ひやり病人其他難儀の人などを憐むことで』あつて、或る學者が我が子にあらざれば哀を思はず、嘆きを知らざるは禽獸の心なり、その喜び樂むことも亦同じ、我が喜び憂ひの心を擁して人の事を思ひやるべしと云つた如く、自分がその境遇に立つた時に、人がどういふ風にして呉れたならば自分が喜ぶか、自分が病氣や難儀をした時

の事を考へ合して、他人が病氣をしたり難儀をした時に、能く之を思ひやり之に同情を寄せる、即ち基督の云へるが如く『己の欲する所之を人に施す』と云ふ思ひ遣りを以て、相互に親切を盡し日々の交際を爲すは、即ち爰に始めて人間の美質が現はれるのである。

要するに以上の修養を積み省みて疚しき處なく、初めて安心立命が出來晴々しい心を以て、時々天眞爛漫な樂をなし、公明正大愉快に心持よく暮すことが出來るのである。

平凡は眞の偉人也

新渡戸博士曾て吾人に敎へられて曰く、余は一身を守つて他に迷惑をかけない、換言すれば自分も樂しみ、他人にも樂しみを與へて世を渡るには、えらい學問もえらい研究もいらぬと思ふ、そして何事を見るにつけても聞くにつけても心に浮ぶ者は、人生に最も必要なるものは最も平凡なることであると思ふ、平とか凡とか云ふから直ちに値打なき、詰らぬ物の如き感を起すのであるが、つまり最も必要であるが爲めに、最も普通に世に行はるゝが故に、平とか凡とか稱するのであつて、平凡の務を最も

よく全ふするものこそ非凡なる人であるまいかと思ふのである

現今の社會をぶち毀せとか、高位高官にある人の批評を不遠慮にするとか、金持に喰つてかゝるとか、博士連中の惡口を云ふことは、如何なる平凡の人間も出來得ること、否な平凡であればあるほど斯の如きことはして見たいものである、故に余も度々やつて見たい氣が起る、又斯の如きときには一つ鬱憤を晴らして見るに、一時的の慰みは之れが爲めに得ないでもないがそれが爲めに社會に或は他人に如何なる利益を施すであらうぞと思ふと、寧ろ害の方が多いとか信ずる爲めに、余は斯の如き

ことを遠慮するのである。

公徳なるものも斯くの如きものではあるまいか、道路を歩いて傍若無人に大手を振つて、傍に歩む不便利を計らず、或は子供などにはこわいと思ふやうに道路を濶歩するのは、一寸見れば奇人た面白い人だ、愉快な奴だと思はれるでもあらうか、一時自分に快哉を叫ぶために、公衆の迷惑になることは宜しく慎しむべきものと思ふ、こんなことは平凡の中にも最も平凡のものであるが菜根譚の内に人生は一歩譲るにあること屢々繰り返してあるを見ても、文字で易さしく、行つて難きはこの點に

あることが明かであると思ふ。

詰り議論して平凡だといふことは、論理以上のことなる證據だ、先づ一つやつて見たまへと云ふ一言に、議論の曲直が定まることが澤山ある、泰山を挾んで北海を越えると云ふやうなことは、勇ましくて如何にも聞いて愉快である、且つ氣象はかくも欲しいが、先づ一つやつて見たまへと云つた時には、かゝる大言壯語する人は、泰山どころか一貫目の荷物をしよつて大海どころが小流を渡るにも、小言云つたりうなつたり、否な一貫目の荷物のために腰を折つたり、溝を越へるに落ちて溺死す

る態のものが多い。

或る時旅行の際に或る田舍宿で、少し年のいつた給仕女が、夫に別れ身代を失つて家が破産し、遂に奉公に出て給金の中から、二人の小供を養つて居たのに遇つたが、余が泊つた晩に一人の小供を失つて、その電報を受取つた時は、最早生きてゐる甲斐なく思つたが、臺所で泣く譯にも行かず便所で泣く譯にも行かず、室にかへれば客の手の音がするので、泣くことすらも出來ずに齷齪日を送つたが、商賣のことであるから佛頂面も出來ずして、その一日も暮らし翌晩床に入つて、やう〳〵枕を濕

していくらか愁をもらしたと、余は聞いたときにはえらい者だと感服する外はなかつたのである。

若し余であつたならば一心が狂つて、近所の井戸にでも飛び込みはしまいか、假しそれまでに行かずとも、客に對しても泣面を見せたり、主人の命令に從順でなかつたり、一言で云ふたならば世の中の人に何かの不愉快を與へはせなんだであらうかと思つて、この給仕女のえらいことをつく〳〵感服して、今にも忘れることが出來ぬが、若し此給仕女をして人世觀を述べさしたならば、恐らく余の半分も演說は出來まい、余は人のえら

さを計るにその人の實行力を以てしたいと思ふ、而してこの實行は平時に現はれないで、國が麻の如くに亂れた時に、初めて現はるゝものである。

亞米利加のやうな平凡主義の處でさへも、クランドのやうな人もある、支那の歴史や日本の歴史の戰國時代に、えらい人物の現はれたのは皆なそれである、忠臣義士の話を聞いても、平素の行ひだけはとても我々が感服出來ない淫らな人も澤山ある故に余は非常のときに現はれるえらさもあると信ずるが、たゞその非常の時を見越して、平時の義務を怠ることはまだえらさ

の半片に過ぎない、日頃も小さなことについてちやんとその云ふこと爲すことが治まつて、尙且つ非常の時にもその時の要求に叶ふ如き人物こそ最もえらいのではないか。

大石良雄がえらいと云ふのは、祇園に遊んで居る時よりわかつたのではなく、赤穗の貧乏世帶を日頃治め、且つ人心を纏めて居つた處がえらいので、よし彼が晝行燈の綽名を受けて居たにせよ、事なき時は藩主と藩士の信頼を受けて居た處が、彼の眞價を現はす處であつて、一朝事あつた際に彼の心は動かずして、最後まで一貫して遂に大事まで全ふしたことは、日頃の性

格が一層發揮したに過ぎないと思ふのである。

ソンコルンにしてもその大統領となつて、不朽の聲名を博したのは、彼が青年時代にその村落にあつて、尙ほ老翁老媼を初め少年少女よりして、尙ほ深く敬愛を受けた事實に歸するのである。

要するにごく平凡な日々の行ひを全ふして居つて、非常な時にも尙ほ狼狽せずして、その非常なる責任を全ふする日こそ、眞の偉人なる人と思ふのである。

◆人生の禍福

禍福の岐るゝ道

人生は其心一つによつて一生を悲慘に送ることもあれば、又幸福に生涯を營むことも出來る、然らば此心とは果して如何なるのであらうか、到底測り知ることの出來ぬ不思議のものであつて、或る哲學者の言に、心は風の如く其來るやいづくよりかを知らず、其去るやいづくなるを知らず』と云つて居る、實に心は斯く端睨すべからざるものである、故に一生を愉快に暮すのも又不平

煩悶に送るのも、結局心の作用一つによるのであつて、所謂人生の福禍は只此心一つの持ちやうによつて決するのである、即ち此心の持ちやうに依つて世の中が樂しく見えたり、又苦しくも見ゆるのである、即ち我心に憂あれば外物も亦憂を帶び、我が心にして樂しめば天地萬物皆之れ樂しく見ゆるのである、見よ彼の山川を跋渉するは頗る疲勞を感ずるものである、併しこれも自己の好める遊獵の爲めにする場合であれは、毫も勞苦を感ずることなくして却つて多大なる興味を覺ゆるものである、之れに反して義務として働く場合に於ては、假令之れよりも遙

かに少い奔走なりと雖も、体力以上の過勞として不平を呟くであらう。

斯くの如く同一の山川跋渉なりと雖も、一は快樂の極と稱せられ一は又勞苦の極と稱せられて其間には天地の差があるでないか、これ畢竟人生の苦勞が第一に其心の持ち樣に依つて決する爲めであつて、勞其ものに苦樂があるものでないのである

仕事を苦痛とするのは即ち爲さねば爲らぬ義務ありと感ずるが故であつて、今日もかく爲すことが出來ることを嬉しと思へば、前途に横はる仕事は苦樂にあつすして愉快の種となるので

ある、されば『樂天家に對しては人生は喜劇となり、空想の奴隷に對しては人生は反對に悲劇として現はる』と彼のワルボールと云ふ人が曰つて居る、故に逆境に陷り困難に遭遇すると雖も、其心の持ち樣一つに依つて逆境必ずしも逆境でなく、災難必ずしも災難ではないのである。

苦樂とか貧富とかいふも心の持ち樣一つに依つて、如何にも之れを堪ゆることが出來るのである『素食をなし水を飲み肱を曲げて之を枕としても樂み其中にあり』と彼の顏回と云ふ人が言つて居る、之れに反して假令金殿玉樓に住み、紫の烟を吐て

自働車を飛ばすと云つても、心に憂ひあれば少しく其愉快を感ずることが出來ぬのである、苦樂は外より來るものでなくして實に只其心より來るものである。

昔波斯王は幸福なる生涯を送りたいと言ふので、天下の最も幸福なシャツを着て、せめては其幸福を做いたいと云つて汎く之れを全國に求めさせた、所が極めて最大幸福な職工があると云ふので、王は喜んで早速之れを取調べたら、彼は實に幸福な生活を送つて居るに相違ないが、併し彼はシャツを着てゐなかつたと云ふ事である、心の持ちやう一ッに依り成らざる事なき

國王の身分でありながら、尙ほ幸福を求むるも之を得る能はず僅かに其日を送る職工でさへも、心の持ち樣一つにては、天下の最大幸福者となることが出來る、吾人は今日靑年が世に處する要件としては、實に此職工の心の持ちやうを薦めたいのである。

富者より之れを見たなれば、衣食にさへも充分にあらざる職工が、何が故に世界に於ける最大幸福者と云ふことが出來るであらうか、彼は自己の職業に趣味を以て心に充分なる滿足があつたからである、彼には職業の趣味があつたから世の中を愉快

に送る、彼には充分の滿足があつたから何等心に不平煩悶もなかつたのである。而して彼が趣味を有し滿足を感じたのは、常に事物を善意に解した爲めである。

世間の事物は常に之を善意に解するの必要がある、他人が己に對する行爲を惡意に解するときは、即ち自己に不愉快の念起り且つ種々なる疑惑を生ず、不平煩悶の起るは常に其解釋の間違ふ爲めである、甚しきに至つては一生を悲慘なる運命に導くの例は、到る處に珍らしくないのである、之れに反して凡てを善意に解するに於ては、腹の立つこともなく又不平も起らない